

在ハンガリー
日本人会会報

1999年
夏季号

ドナウ通信

創刊十周年記念

No.40



目次

第一部

在留邦人篇

ハンガリーと日本人―記念号の編集にあたって	盛田 常夫	1
過去と未来を償い終わぬ	糸見 偲	13
ハンガリーへ来た頃のこと	山地 征典	17
ハンガリー二昔（ふたむかし）	サーライ美度里	23
体制転換を遡ること十年	佐藤 紀子	26
移住と引越し	相馬 笙子	30
心動かされたこと	天野 明	32
子育てと子供の葛藤	天野真理子	33
私の学生時代	萩原 淑子	34
ハンガリーとのお別れ	八幡富美雄	36
嗚呼、「ハンガリー」雑感	伊桜 誠	37

第二部 歴代大使・公使・令夫人篇

「ハンガリー民主革命十周年」に寄せて

「ドナウ通信」発刊の頃

実現するか、マルトンの彫刻展

文化大国とのお付き合

私たちの夏休み

人道と外交

関 榮次

渡辺 伸

堤 功一

田中 義具

堤 一実

糠沢 和夫

41

45

49

52

53

55

第三部 補習校篇

「ドナウ通信」創刊の頃

補習校の歴史

飯田 信夫

園部 文夫

57

58

ハンガリーと日本人

記念号の編集にあたって

盛田 常夫

発刊の頃

「ドナウ通信」が発刊されたのは一九八九年五月。ちょうど関榮次大使が赴任される直前で、当時の渡辺伸公使（現アルジェリア大使）、日本人会会長の草薙さん（当時伊藤忠所長）、補習校の飯田先生が中心になって編集・発刊の運びとなった。時まさに社会主義体制の歴史的な転換時を迎え、歴史の大きなうねりのなかで、「ドナウ通信」第一号が誕生した。私自身は八八年八月末から二年の契約で、ハンガリーでは初代となる大使館専門調査員として、二度目の長期赴任にあった。

一号から四号までは飯田先生が編集を担当され、五号からは天野日本人会会長（当時トーマン所長）が、

七号から一四号まで江原日本人会会長（当時日商岩井所長）が、そして一五号から私が編集を担当し、現在に至っている。最初の二頁建てから三二頁建てにまで紙面は拡充したが、四季報という性格は変わっていない。今回の一周年記念号の編集にあたり、歴代の大使、すでに日本に戻られた方々のほか、古くからハンガリーに定住されていらっしゃる方々にご寄稿を依頼した。この機会を利用して、執筆者のご紹介をかねて、少しばかり「ハンガリーをめぐる日本人」の記録を紐解きたい。

「ブダペスト日本人」の草分け

私がハンガリーを初めて訪れたのが一九七八年二月一九日。どんより曇った冬の午後、予定より一日遅れで到着したため迎えがない寂れて閑散とした空港に降り立ち、尋ねる相手も住所も知らず、途方にくれた状態から二年弱のハンガリー生活が

始まった。遅れることは東京のハンガリー大使館に連絡したし、大使館の方は着けば分かるからということだったが、ハンガリーの官僚組織の無責任と組織性のなさを最初から体験することになった。気を取り直し、アナカンの荷物まで引き取って3時間後には指定の下宿に落ち着いたのだから、これは奇跡に近かった。すぐにクリスマス休日になり、歯が立たないパンを売っている店すら閉店してしまい、慌てたのを思い出す。

この頃、田路（現伊藤忠所長）さんが一足先に単身赴任されており、大使館には一等書記官でハンガリー語専門官の草分けである川合智司さん（現中央アフリカ大使）がいらっしやった。入国管理局からは鈴木祐二さんが出向されており、昼間の領事の仕事と宿直の担当だった。やがて夜長に退屈している鈴木さんを尋ねて、大使館の狭いホールで卓球したり、麻雀するのが日課になったも

のだ。この頃はとにかく万事が牧歌的だった。

当時、駐在員や留学生以外でハンガリーに定住されていたかたはわずかで、舞台女優から映画評論へと転身した糸見徳さんが、コーシャ監督へのインタビューをきっかけにブダペストに居を構えたのが一九七一年。ペルシャ語専攻の山地征典先生が留学先で知り合ったハンガリー人女性と結婚され、ブダペストにいらつしやったのが一九七二年。丸紅の事務所勤務されている鈴木恵子さんは文通を通じたロマンスが実り、定住されたのが一九七五年。彫刻家の三井泉さんがハンガリーに定着されたのは一九七六年。これらの方々がハンガリー在住の最長不到年記録を更新されている。

この前というと、戦後の国交回復が一九五九年だから、語学専門官二代目の川合さんが研修生だった頃の話になる。川合さんの研修生・大使

館勤務が一九六〇～六四年。六十年代には歴史学者の羽仁五郎さんの娘さんである羽仁協子さんが、コダーイの教育法を勉強されていた。戦前に留学されていた徳永康元先生を別格とすれば、日本でハンガリー通と言えは羽仁さんだった。私も国費交換給費生の試験を受けるために、芝田進午教授の口利きで、羽仁さんに推薦状を書いていただいたのを覚えている。

一九七四年にはハンガリー第一回国際指揮者コンクールで小林研一郎さんが一位の栄誉を受けられ、これが本格的な指揮活動の始まりとなった。マエストロ小林はハンガリーが日本に逆輸出した文化財にほかならない。応募期限が切れたコンクールになんとか応募できないかと知己を辿り、都倉大使のご尽力で滑り込みセーフになったという歴史的に因縁のあるデビューだった（この辺りの事情は、小林研一郎『指揮者のひと

りごと』騎虎書房に詳しい）。ちなみに、都倉大使のご子息で作曲家の都倉俊一さんと女優の大信田礼子さんはマーチユアシユ教会で結婚式を挙げられた（その後離婚されたが）。

私が初めてハンガリーに来た当時はまだ日本人が少なく、タクシーに乗るたびに「小林を知っているか」と聞かれるのには閉口した。日本人といえば、小林研一郎のことだった。

現在の大使館は一九九五年に、併設されている大使公邸は一足早く一九九一年に完成したのだが、それ以前は一九六四年からほぼ三年間、大使館がローメル・フローリツシュ通り、大使公邸は同じく二区のパガール通りにあった。国交樹立直後、大使館の最初の事務所はマルギット島のグラランド・ホテル内に設けられ、それからマルギット環状通りに移り、ローメル・フローリツシュに移ったのだった。

一九七六年に開設された日本人補

習校は一九九三年春に現在のモーリツ高校に移るまで、旧大使館の地下室に設置されていた。ちなみに、この一番奥の湿っぽい部屋が伝説の宿直室だった。糸見さんなどの尽力で開設された補習校だが、当時は長男のバーリント君が毎週土曜日の就学前教育で補習校に通っていた。私が初代の補習校理事長に就任した一九九二年に、モーリツ高校の新校舎への移転を知り、佐藤紀子さんと一緒にモーリツ高校の校長と交渉して、開校前の教室を借り切る契約を結び、補習校の移転にこぎ着けた。

奨学金留学生の群像

両国間の文化協定にもとづく国費の交換給費生制度は一九六五年に発効していたが、日本側からの留学生は少なく、ようやく七十年代半ば以降に定員を満たすようになった。私の一期前には大学院生の家田修（現北海道大学スラブ研究センター助教

授）・古河幹夫（現長崎県立大学助教授）の両君があり、中学を卒業して勇敢にも単身でハンガリーに渡航し、ロンドンに在学していた深谷志寿君（現東海大学助教）もこの奨学金を流用する形で滞在延長していた。

私の同期で給費を受けたのは羽場久尾子さん（現法政大学教授）で、次期の給費生だった佐藤紀子さん（現貿易経済大学教授）とともに当時は津田塾大で東欧史を学んでいる大学院生だった。当時、津田塾には東欧経済史研究の第一人者である南塚進吾さん（現千葉大学教授）が教鞭をとっておられ、東欧史研究の若い研究者の育成にあたっておられた。羽場さんも佐藤さんも百瀬教授のゼミナール出身だが、そういう経緯でハンガリーに戦略的に派遣された大学院生だった。佐藤さんと同期の早稲田みかさん（現大阪外語大学助教授）はロンドンでハンガリー語学を学び、外大のハンガリー語学科創設の

スタッフとなった。

八年末に東大生産技術研究所大学院博士課程から留学した板井一真君は、その後、中央物理学研究所の연구원として定住することになった。地味な物性物理の専攻だが、もう語学の能力も生活もハンガリー人そのものだ。無駄に日本人とは付き合うことなく、わが道を歩まれている。佐藤紀子さん同様に、日本に戻ることもなく、ハンガリーに定着された。

私はといえば、ハンガリーとの接点は何もなく、教鞭をとった法政大学の環境があまりにひどくて、大学を移るか、留学で大学を離れるか一生懸命に将来設計を考えている所に、恩師である一橋大学経済研究所の倉林教授（現東洋英和女子学院教授、文化経済学会会長）から「君の専門ならハンガリーが面白いよ」と言われて、それならと給費生試験を受けたのがきっかけだった。ハンガリーは旧体制の時代から国民所得統計の

国連標準体系化に取り組んでおり、国際学会でもハンガリーの研究者が活躍していた。倉林先生は一九七三年にバルトンフユレッドで開催された国際所得国富学会の総会に参加されており、ハンガリーの学会事情だけでなく、この辺りの音楽事情にもたいへん詳しくかった。

ハンガリーへ来る必然性はなかったが、大学三年生だった一九六八年夏、大きな団体の通訳の仕事でブルガリア、ルーマニア、ソ連を旅行できる機会があった。ブルガリアのソフィアではカルメン歌手で有名だった成田絵智子さんのレッスンなどの通訳として立ち会ったのを覚えてい

国別対抗室内サッカー大会

一九七九年には大使館の八幡さんが語学研修生として初めてハンガリーにいらっしやった。その次の研修生が伊桜さんになる。この頃、音楽の留学生としてピアノの渡辺健二さん（現東京芸術大学助教授）や神野明さんがリスト音楽院で勉強されていた。七九年の二月だったか、八年の一月だったか、ブダペストに駐在する外国人の国別対抗室内サッカー大会に日本も出場しないかという話が大使館に持ち込まれた。日本ではまだ馴染みのないスポーツだったが、やってみようじゃないかというので、日本チームが結成された。渡辺君や川合さん、伊藤忠の武井所長、八幡君、大使館に輸銀から出向されていた高橋さん、住友商事の飯尾さん、雑鑑別師の加藤さん、大使館の鈴木さんが出場した。とくに高橋さんは輸銀のサッカー部だったというので期待していた。私は大学で同僚たちと室内サッカーをやっていたの

で、少しは自信があった。

一試合二分の試合を六試合おこなった。これは本当にきつかった。結果はイギリスBチーム（素人チーム）と引き分けただけで、あとは惨敗の最下位。ドイツチームなどは揃いのユニフォームで出場しているというのに、日本チームだけがバラバラ。田路さんなどは革靴を履いた出勤スタイルでキーパーをしていた。日頃運動をしていない連中が、それも交代要員がほとんどいない状態で闘ったのだから、被った被害は大きかった。キーパーだった川合さんは強烈なシュートを手のひらに受け、数針の裂傷で病院に駆けつけることになった。武井所長は交代で出場した二分後にアキレス腱を切り、二ヶ月ほど仕事から遠ざかるはめになり、私はメガネを一個損傷するという具合だった。杉原大使から一名ほどの大の男の昼飯に、弁当一個の差し入れがあった。これは長い間、語り

草になった。食い物の恨みは恐ろしいといべきか。大使は外務省を退職されてから穂高登山中の不慮の事故で亡くなられた。ご冥福をお祈りする。

日本の唯一の得点は高橋さんのペナルティ・キックの一点だけ。一九七七年二月にモスクワへ出張した折、たまたま輸銀の首席代表としてモスクワに駐在されていた。私の高校の一年後輩で政治担当公使の角崎利夫君とともに夕食するという懐かしい出会いがあった。

日本レストランのこと

東口（サライ）美度里さんが幼児教育の勉強にいらっしやったのは一九七九年。当代切つてのピアニストであるコチシュ・ゾルタンとのロマンスも話題になったが、何よりも日本レストランを拡充し、日本食品の輸入に大きな貢献をされた。もともと、最初の日本レストラン「ヤーパ

ン」がエルケル劇場の前にできたのが、一九八六年。当初、これは日本のある専門商社がハンガリーにコム違反の精密工作機械を輸出する見返りに設立されたもの。一九九一年にみどりさんがこれを買収するまで、ハンガリーの国営ケータリング会社とこの商社の合併事業だった。初代の板前として赴任したのが外間勇清さん。当時は生の海魚が入らず、日本レストランとは名ばかりで、寿司を食べることはできなかった。みどりさんが買い取ってから、見違えるように改善された。

記憶に間違いなければ、最初の日本人会総会が開催されたのは一九七九年二月。集まったのは四名にも満たなかったと思う。実際には寿司パーティと呼ばれ、日頃食べられない寿司を食べるのが目的だった。大使館に電気釜を集め米を炊き、会場のヒルトン・ホテルに運ばれた。以後、ドウユゼルドルフの寿司屋から

高い運賃とホテル代を払って出張出前してもらった習慣が続いていた。何か寿司が食べられる時代になっても二月の総会は寿司パーティなどと呼ばれていた。いくらなんでもコストがかかりすぎるし、食べ物に執着するようで見苦しくはないかという正論が通って、この習慣が廃止されたのはつい最近のこと。飽食の日本人は粗食に耐えるイギリス人やドイツ人には勝てないと思つたものだ。

みどりさんの手に渡ってから、「ヤーパン」のマネージャーに抜擢されたラースロー夫妻が、あらゆる知恵（だけではない）を盗み込んで二年ほどで自前の店を持ったのが現在のレストラン「四季」。日本に戻っていた外間さん呼び戻し、「ヤーパン」から腕の良いコックとウエイトレスを全部引き抜いて開店したものだ。彼の経営能力はたいしたものだが、もう少しみどりさんや外間さんに恩義

や仁義を尽くしてもらいたいと考えるのは私だけではないだろう。もつとも、この種の裏切り行為は利に聡いハンガリー人に見られる行動パターンだから、注意する必要がある。今はもうなくなつたがウィーンの寿司店「寿司祐」は伝説のピアノスト・グルダ前夫人である祐子さんが開いたもの。経営がうまく行かず店を閉める話があつた時に、板前で寿司職人の奥山さんを引つ張つてきたのもみどりさんだ。お陰で日本でも食べられない奥山さん十八番「ばつてら」がハンガリーで食べられるようになった。「ARIGATO」の上原夫妻も、ラーズローの後、日本レストランのマネージャーをされていた。いろいろあつたが、結局のところ、「のれん分け」のような形で今の店が開設された。外間さんは老舗のレストラン「ムーゼウム」のウエイター長と組んで九八年に開いた店が、現在の「ケーキ・ラグーナ（砂州湖）」

である。

というわけで、ブダペストの日本レストランの発展はすべてみどりさんの直接・間接の努力や苦勞と、外間さんのノウハウ伝授があつて実現してきたものだ。「ヤパイン」が新装開店されるレストラン「富士」の成功を祈りたい。

朝鮮焼き肉の「セナラ」はちよと別で、これは福島でチエーン店を展開している在日朝鮮人の所有と経営（実際の経営はハンガリーの会社）になるもので、ウィーンにある「セナラ」の姉妹店として、一九九九年に開店した。九九年秋に開店した当初は、日本人で連日満員だった。

一九八〇年代

日本に戻つた田路さんが日本の自動車産業の拠点を東欧に設立しようと、一九八〇年代を通してこの地域を奔走していた。田路さんがいなければ、スズキの進出はなかつた。八

ンガリー進出では後発の商社で一九八七年に事務所を開設したトーマンが、天野明所長（現トーマン・パウ・ヨーロッパ社長）の手腕で、一気にグラスウール工場とリジン工場の二つの合弁事業を手がけたのは見事だった。

八〇年代初めには美貌のピアノストで知られる岡崎由美（岡崎嘉平太のお孫さん）さんが留学していた。お父様が日本・ハンガリー友好協会の理事をされている萩原淑子さんは中学卒業と同時にブダペストへ。八〇年代にリスト音楽院でバイオリンを勉強され、今はブダペスト祝祭オーケストラ（フェスティバル・オーケストラ）で活躍されている。

東欧史を勉強されていた千賀徹さんがスロバキアからハンガリーに移られたのが一九七五年で二年滞在された後いったん日本に戻られ、再びハンガリーに定住されたのが一九八五年。

私はと言えば、一九八二年に法政大学とブダペスト経済大学との教員交換協定を締結して、一九八三年には社会学部の創設二五周年を記念する行事にアカデミー経済研究所のクルナイ・ヤーノシュ（現ハーバード大学経済学部教授）を招聘し、記念講演をお願いした。クルナイは正統派経済学を批判した『反均衡』（一九七六年に日本経済新聞社より翻訳出版）の著書で国際的に知られていた。一九八一年に出版された大著『不足の経済学』で社会主義経済分析の新しいパラダイムを提示し、その後の社会主義経済改革の理論的な拠り所となった。東大の宇沢弘文教授に前座講演を頼み、協定にもとづいて経済大学から派遣された学者を含めたハンガリーセミナーもおこなった。その後、連続して出版されたクルナイの論文集は日本の社会主義経済学界に大きなカルチャーショックを与えたが、中国では体制改革の理論的

な支柱としてクルナイの著作がすべて翻訳出版され、改革推進の印籠として活用された。

一九九一年と一九九二年には日本経済新聞の依頼で、クルナイがノーベル経済学賞を受賞した場合に備えて紹介文をスタンバイさせていたが、これはお蔵入りになった。また必要になる時が来るかも知れないが。

体制転換の頃

一九八六年頃からハンガリーの政治が動き出し始めていた。経済学者を中心に、改革要求がだされ、それがゴルバチョフ改革の順風を受け、政治的な動きにまで発展して行った。川合さんが外務省東欧課に戻られてから、東欧課とは日常的につながりがあり、一九八四年には外務省の出張で東ドイツ、ハンガリー、ブルガリアを回った。一九八七年になって川合さんから補正予算で専門調査員の要求でも出そうと思うので引き受

けてくれますかという話があった。渡りに船だった。

一九八八年夏に赴任したが、すでに共産党（社会主義労働者党）内部の動きは活発で、中央委員会や政治局ではかなり厳しい対立が起きているようだった。当時のハンガリー科アカデミー総裁のベレンド（前経済大学学長、現カリフォルニア大学ロシア・東欧研究所長）は改革派のメンバーとして中央委員に選出されていた。ベレンド先生は南塚さんの恩師にあたり、日本にも良く来られた。法政大学で開かれた講演会に大学から少しばかりの予算を捻出するように尽力した。そういう関係もあって、中央委員会が終わることに彼を訪ねて、中央委員会の議論を聞き、分析に役立てていた。ベレンド先生は、「一九五六年の動乱見直し」委員会の主査でもあったから、この報告書などにも早くから目を通すことができた。

この時期、さすがにアメリカの対応は早く、テニス仲間でもあった当地のパーマー大使はブツシュ大統領のポーランド、ハンガリー訪問を実現すべく、精力的に動いていた。これが実現したのが一九八九年七月。アルシュサミットを前に、カール・マルクス経済大学で講演した。チャールズ皇太子が同じ講堂で、それも今度は意識的に「カール・マルクス像」の真横で講演したのもこのすぐ後だ。ブツシュ大統領の講演では記者席になつていて隠されていた部分だ。さすがにヨーロッパの王室は懐が深く、余裕とユーモアがある。日本の宮内庁だったら真っ青になつて大慌てするところだろう。

この頃は本当に毎日が事件の連続だった。社会主義労働者党の指導部が変わり、日本を二度ほど訪問した経験のあるニエルシュ・レジュイーが党首になった。法政大学でも彼のセミナーを開いたことがあり、新宿の

街を案内したりもした。物静かな風貌や語り口はカーダールを彷彿させるところがあつた。七月初め閣大使に随行して当時「ホワイトハウス」と呼ばれた労働者党本部にニエルシュを尋ねた時に、彼の口からカーダールの死去が知らされた。

八九年の一月には社会主義労働者党が解散して、現在の社会党ができた。大会はコンGRES・ホールで開かれ、日本からも報道陣が大勢押し寄せていた。大会ではコーシヤ監督やボジユガイを中心とする急進改革派と旧左翼勢力との激しい主導権争いになり、左右混在する指導部が結成された。その後、幹部会員になつたコーシヤ監督が大会期間中におこなつた読売新聞記者へのインタビュ記事が「左派」の反撃に会い、NTVの番組で寄安書記官がハンガリー語で誤解を解くインタビュをおこなう一幕もあつた。

文化的な関係でいえば、ハンガリー

国立オーケストラの重鎮フェレンツック・ヤーノシュが亡くなり空席になつていた首席常任指揮者に、マエストロ小林が選任されたのが一九八七年。楽団員の投票で決まつた。残念ながら、日本人社会は文化の世界的価値を判断する見識に欠ける。こういう節目にお祝いの会を開く知恵がない。日本の会社にはゴルフ会員権を買う名目はあつても、文化的行事に支出する費目がない。これが欧米の会社と決定的に違うところ。グローバル化し切れない底の浅さがこういうところで露呈する。

海部総理訪問：新しい関係へ

ブツシュのハンガリー訪問で日本の外務省の風向きが変わつた。九年始めに海部首相がハンガリーとポーランドを訪問することが決まつた。日本の現役首相としては初めての公式訪問である。

八九年九月のオーストリア国境開

放で、体制転換の最終幕が開けられた。日本からの報道陣もひっきりなしかった。年も押し詰まってから、NHKの正月番組の製作で磯村尚徳さんチームが乗り込んできた。糸見さんと三五年振りの対面ということで、ラマダ・ホテルでスタッフ一同と食事をアレンジした。糸見さんが磯村さんのことを「デレさん」というのでおかしかった。いつもデレデレしていたから、「デレさん」なのだという。

少し時間は前後するが、一月初めには草柳文恵さんをレポーターとする北海道テレビの取材陣が一週間滞在して、体制転換の先進国ハンガリーとポーランドを回った。ところが、草柳さんは到着直後に原因不明の腰痛で動けなくなった。TBSラジオの定時番組の電話インタビューがあるというので、急いで原稿を用意し、腕を抱えて電話口まで連れていったのを思い出す。次いでにワルシ

ヤワから電話する原稿も準備してあげた。取材陣が帰った後、ベルリンの壁が崩れ、新年の放映に状況が合わなくなり、慌てて再編集がおこなわれたりしたようだ（このドキュメンタリーは九年二月にTBS系列で全国放映された）。これで海部首相の日程も変更になり、メインのスピーチがおこなわれるはずのハンガリーが休養を兼ねた最後の訪問地になり、メイン・スピーチはベルリンに持っていかれた。

それを償う意味もあって、関大使のアイディアと強力なネゴで、ハンガリーでは経済大学での「学生との対話集会」を売り物にすることが決まった。これを組織するのが私の仕事だった。ちよど学長のチャーキ・チャバと国際担当副学長のザライ・エルヌーは同僚だったから、お膳立ては簡単だった。問題は総理官邸が注文してきた内容だった。総選挙を控え、失点を恐れる側近たちは、「事

前に質問を集めよ。通訳は同時通訳ではなく、逐次訳とせよ」と指示してきたのだ。ヨーロッパでは王室でさえ即興で受け答えするのだ。まして政治家なら日本人でも即興で対応してもらいたいと考えるのがふつうだが、そこは議論しても始まらない。渡辺公使も側近からの連日の催促に困惑されていたので、ザライ副学長と学生自治会代表に会って日本の政治家の事情を説明し、状況を理解してもらい何とか処理した。通訳については臨場感を出すために同時通訳で行きたいと、関大使、渡辺公使に官邸へ押し返してもらった。といっても、ハンガリーで日本語とハンガリー語の同時通訳がおこなわれたことはなかったし、そのような準備があつたわけでもない。それで急いで、山地先生、佐藤さん、EJH講師のセルダヘイ君（この七月より駐日大使として赴任）に声をかけ、必要な原稿を用意し、あたかも同時通訳の

ごとく進行するように手順を決め、前日にはリハーサルまでして対話集會に臨んだ。その甲斐あって、まことにスムーズに事が運んだ。学生諸君がよく協力してくれた。ただ、最後になって時間があまり、一つだけユーモアのある即興の質問がだが、絶妙な応答で会場が沸いた。海部訪問団を指揮したのは小和田審議官だったが、対話集會にはたいへん満足の様子だった。

この時期、閣大使と渡辺公使の強力コンビがいなかったらとてもやりきれなかったと思う。当時の日本人社会ではようやくハンガリーにまともな大使・公使が派遣されたと歓迎されたものだ。こういうエポックメイキングがあつてから、日本サイドでのハンガリーの位置づけが一段ク上がったようだ。以後、歴代の大使は本当にハンガリーと日本の関係発展のためにご尽力される方々が着任されるようになった

ブルー・リボン委員会のこと

八九年暮、春の総選挙後に樹立されるであろう新政府への経済政策を提言する国際的な助言組織が作られた。これは五六年動乱時にアメリカに渡ったインディアナ大学のマラー教授のアイディアで、この組織はブルー・リボン・コミッションと命名された。インディアナ大学やハドソン研究所が設立メンバーだった。自由民主連合のタルドシュがハンガリー側を代表する議長でシヨロシュもアクティブなメンバーとして参加しており、アメリカ系ユダヤ色が強かったが、現在活躍中の社会党系のマラーからファンディング・メンバーとして支援してくれる日本の機関の紹介を頼まれた。ちょうど野村證券が東欧への進出を検討中で、野村総合研究所はその調査に踏み出そうとする矢先だった。二週間ほどで野村総合研究所の参加が決まった。

インディアナ、ブリュセル、ウィーンで会議を開いた後、九一年三月のブダペスト会議には野村総研の水口弘一社長も参加された。委員会の提言は総選挙直前の五月に発表され、七月には野村総研の主催で東京会議も組織された。

二世紀最後の歴史的な変動を眼前にし、大学へ戻る意味が失われた。九一年二月に法政大学を辞し、今度は野村総合研究所のスタッフとして再びブダペストに赴任した。

九一年代の新しい発展

体制転換に始まる東欧ブームは早一九九一年の湾岸戦争で影が薄くなった。それまで怒濤のごとく続いた日本企業の東欧参りがぱたりと止んでしまった。もともと日本企業にとって小国で分割されている大陸ヨーロッパはビジネスとしてのうま味が小さく、直接投資の規模も大きくない。まして東欧はまったくゼロに近い。

い存在だった。いかに東欧ブームとはいえ、所詮それはジャーナリズムが作り出したもの、商売の目算からいえばすぐにビジネスの対象として考えられる地域でなかった。

ちようどこうした端境期に赴任されたのが堤大使（九二～九五）であった。とはいえ、九二年には故アンタル首相の公式訪問が実現し、ハンガリーとの外交関係は着実に発展していった。また、日本での「ジョルナイ」展の開催はひとえに堤大使ご夫妻の執念に近い努力によるもの。一九九四年三月には開業して間もないケンピンスキー・ホテルで、マエストロ小林の「ハンガリーデビュー二周年」を祝う会を開いた。当初、日本人会と商工会にこの会のご支援を依頼したのだが、二時間以上議論しても埒があかないので、もう時間の無駄と支援は諦めて私が個人的に組織することにした。日本人会の皆さんには高額の参加チケットを買っ

ていただき費用の半分を賄い、大使館とケンピンスキー・ホテル支配人からの寛大なご支援を得て、何とか盛大な会を持つことができた。ちようど早稲田グリーンクラブが同行しており、彼らにも出演願ったが、彼らをもてなす食事の席を設けられず、夜七時から深夜まで五時間にわたるプログラムの間、立ち通しという不都合を強いてしまった。もつとも僅かな資金で三百名近い出席者を満足な飲食でもてなすのは初めからできないことだった。この模様はドウナゴの五分番組にまとめられて、これまで繰り返し放映されている。会の終了後、参加された方々から「事前にこのような素晴らしい会だと思わなかったら、支援することもできなかったのに」と御礼を言われたが、後からでも遅くないはず。実際にご支援いただいたのは、トーマンの天野さんからだけだった。

一九九五年頃より再び東欧の位置

づけが見直され、ハンガリーへの日本の直接投資が始まる兆候が見られた。田中大使は赴任される直前に野村證券の斉藤副社長を訪問され、ホルン首相の非公式訪問を実現するにあたり、野村證券からの支援を依頼された。この努力が実って九五年二月にホルン首相の訪問が実現し、野村證券が「ハンガリー投資セミナー」を本社講堂で組織する榮譽をいただいた。ちようど「ロズ」が投資計画を発表したところで、ソニーも投資決定の最終段階にあった。うまいタイミングでこの訪問が実現した。以後、ハンガリーへの日本企業の投資は着実に増えている。これまでのいろいろな努力がようやく実を結びつつあるという段階だろう。

建国千年祭をめぐって

一九九六年はハンガリー建国千百年祭の年で、一年を通していろいろな行事が開かれた。外国の行事とし

ては日本だけが突出して数十の祝賀行事を開催するという目立った動きになった。ちょうどこの年、サムライ債の発行が相次いだこともあって、欧米系の外交団やビジネス社会が日本の目立ちすぎを快く思っていないか、九月の「秋田の花火大会」がテレビやラジオはもちろん、新聞などのメディアから一切無視されるという奇妙な状況のなかでおこなわれ、国会でも「誰が許可したのか」という質問まで出る始末だった。実際にはブダペスト市が共催している公式行事であり、ゲリラ的な行事でないのだが、政府の有力政治家に直接苦情を言つて「無視すべし」と注文が付けられる外交団がこの事件の背景にあるのは間違いない。こういうことができる外交団は一つしかない。楽しいお祭りに水を差す、不愉快な出来事だった。

ただ、日本側にも考えなければならぬことがある。ふつう資金と技

術を出す日本側は、客寄せは当然のこととしてハンガリー側がやってくれるものだと考える。もっともな感情なのだが、金銭的に一文にもならない文化行事を親身になって組織してくれる個人や組織はハンガリーにはまずないと考えなければならぬ。一から十までこちらがやるつもりでないと、何事もできないというのがハンガリー。もう少し責任感と組織性を発揮してもらいたいものだが、これは簡単に変わらないだろう。

田中大使が離任され、九七年九月には久米大使が着任されたが、駐ドイツ大使が病に倒られ、久米大使がドイツ大使として移動されたため、異例の短期でハンガリーを離任された。そうした不都合を償う意味で、民間大使として糠沢大使が抜擢されたと聞いている。

ハンガリーにはまだここに紹介しきれなかった日本人が活躍している。ハンガリーの祖父母に育てられてい

る小学三年生の金子三勇士君はハンガリーの全国コンクール（ピアノ、ソルフェージュ、民族歌曲）で数々の入賞を記録しているが、そのようなニュースは当地の日本人社会では知られていない。また、現地に定着して地道にビジネスを展開されている方々もいらっしゃる。「ドナウ通信」がそのような人々の活躍を紹介できるようになることも大切かと思う。ハンガリーを離任された後、日本とハンガリーの友好関係発展のためにご尽力されている方々も多い。そうしたニュースも是非、「ドナウ通信」で紹介したいものだ。

ハンガリーで人生の一時を過ごした仲間の情報誌としても、「ドナウ通信」を活用したい。今後の一層のご協力をお願いする。

第一部

在留邦人篇

過去と未来を償い終わりぬ

糸見 徳

十年一昔というけれど、三昔、四昔という云い方はあるのだろうか。兎も角、私とハンガリーとの付き合いは、小さな数字では云えないほど古くから始まっている。まさか、こんなに長く一つの国に執着するとは思ってもみなかった。

熱し易く冷め易い私の性格を知っている家族や友人たちは、一年も経たぬ内にハンガリー熱は治まって帰って来ると思っていたらしいが、とうとう三十年以上も過ごしてしまつた。そして、いつの間にか人生の半分以上を異国で過ごし、そこを「私の家」と呼ぶようになった。私の心をこんなにも強く縛りつけたハンガリーと云う国は一体何なんだろうと、最近、この事を良く思う。

一九六四年、私は生まれて初めて

ハンガリーの地を踏んだ。何の予備知識も無く、かろうじてリストの名前と五六年のブダペスト動乱の事件が少しだけ頭の中にあつた。はなやかなパリの生活に慣れていた私にはブダペストの町は暗く貧しく、心寒かつた。

当時、私は映画ペンクラブの会員として、フリーで雑誌や新聞に映画評論やスターの話題などを書いていた。女性の映画評論家は数少なかったが、殆どが英語圏のフィルム専攻で、私はただ一人のフランス映画派の様だった気がする。六十年代は日本経済も少しずつ安定してきて、市民の生活にもゆとりができ、娯楽として映画がもて囃されていた。二本立て、三本立てで上演されて、映画は作つても作つても人が入つた。日本映画のみならず、外国映画も同時に最盛期を迎えていた。はなやかなスター達が日本を訪れ、その都度、日本中が沸いた。私もフランスのスタ

ー達に出会い、インタビューを通して友情の輪が広がつた。

たくさんの知人のなかで、とくに影響を受けた人が一人いる。フランソワ・トリュフォー監督である。新しい波（ヌベル・ヴァーグ）の旗い手で、フランスのアカデミックな映画界にシャブロールやゴダールと共に一石を投じて新しい波を起した活動家。カンヌ映画祭にパリケードを作つて、映画祭を粉碎した事は有名である。

元来、映画は小説が有つて、それを脚本家がシナリオに直し、監督が映画にすると思っていたが、原作、シナリオ、監督を全て一人ですると云う事を聞いて驚いた。時にはプロデューサーも兼ねて、安い制作費で自分の考えを映画にすると云うやり方は新鮮だった。今でこそ、映画はお金さえ集めれば誰でも簡単に作れるようになったが、昔は映画監督になるには徒弟制度みたいなものがある

って、なかなか一人立ちはできなかった。色んな部門に大御的な存在が居て、自分の思うようには進めなかった。そんな古めかしい主義を打破したのが、トリュフォー達だったのである。

彼から色々な事を教わった。映画に対する姿勢。映画は民衆のための娯楽の一つと想っていた私に映画で社会を変える事ができる、国をも変える事が出来ると教わった。そしてこの考えが後に現在の夫に会わせ、私の人生を大きく左右して行ったのである。

ハンガリー行きはトリュフォーに云われて、実現した。「東欧の映画は面白いよ。チェコ、ハンガリーの映画を見てごらん」と彼は云った。ハンガリーの最初の印象は余りに見すばらしく、もの悲しく、たいへんな所へ来てしまったと云うのが本音だった。遠来の客である私を精いっぱいもてなしてくれる人達の親切が、

かえって億劫な位、私は西欧カブレしていた様だ。今振り返ってその当時の事を思うと、穴があったら入りたい位、恥ずかしい心境になる。

ロイヤル・ホテルと云う外国人専用のホテルが一つだけあって、フンガロフィルムの特別ゲストとして、そこに三日間逗留した。三日の間、色々な映画を見せてもらった。殆どの映画がモノクロで、ヒューマニズムと四つに組んだものが多かった。一日中、たくさんフィルムを見て、ふらふらの頭でホテルの部屋に帰る。なかなか寝つかれないのでラジオを付けてみる。今まで聞いた事もない言葉が出て来る。何を云っているのだろうと必死に聞くが、一つも判る言葉がない。ラジオを切った。しかし、道路からの音も、廊下を渡る人の足音も何もしない。静まり返った部屋は却って不気味で、人寂しさの余り、またラジオを付けた。ひと声、ふた声、喋りがあって、もの悲しい

メロデーが流れて来た。そして、だんだんドラマティックになっていった。私の耳を刺激した。ハツと思つた時、曲は終わってラジオもブツンと途切れた。それからブーと云う電波の音が流れてくるだけ。その夜は妙に息苦しくて、暫く寝つかれなかったのを覚えている。一九六四年のまだ肌寒い春のことであった。

そして半年後、私は東京の国立競技場にいた。そこでまたあのメロデーと出会った。東京オリンピックのサッカーで、見事、ハンガリーは優勝し、この曲が流れ、私はそれがハンガリーの国歌と知った。

仲良くなったバスケットボールの選手達を家に招待した時、ハンガリーの国家を歌ってくれるように頼んだ。その時、彼らは直立しないと歌えないと云ったので、舞台でも作るうかと私は笑った。歌が終わった時、彼等はみんな泣いていた。私も云うに云われぬ不思議な感情の高ぶりを

覚えた。

神よ悦びと富を持つて

マジヤール人を祝福し給え

……………

不幸に追はるこの民に

喜びの年を与え給え

……………

もはやこの民は過去と未来を

償い終わらぬ

未来まで償い終わったと云うのはどう云うことなのか。どんな不幸を背負って来た民と云うのだろうか。考えれば考える程に、私は一步一步ハンガリーに填っていった。

ハンガリー映画は率先して見る様になり、ハンガリーの歴史に興味を持った。六七年、カンヌ映画祭で最優秀監督賞を受けた監督とインタビュウがきっかけで知り合い、七二年十一月、彼と結婚した。

結婚を決めるまでに長い時間が掛

かった。生まれも育ちも違えば、国の体制も違う。言葉も文化も全て異なる二人が共に暮らす事は不可能と云っても良い。犠牲を払うのは私の方が大きいと知っているから、彼は決して無理を云わなかったし、私は私で仕事があるからそれが一段落するまでは一年に一度の逢瀬だった。

フランスの女性誌「エル」の記者もしていたから、一年に一度、私はパリと東京を往復していた。そして、その帰路、必ずブダペストに立ち寄っていた。ブダペスト滞在は三日間。旅行者の場合、それ以上は決して滞在許可が下りなかった。

知り合えば知る程、彼の純朴さ、知識の深さ、映画に対する情熱に惹かれて行った。大阪万博の年、彼は日本を訪ねた。しかし、仕事で忙しくしている私は、彼の面倒は両親に頼んだまま。この事が余程寂しかったのか、彼の最初の日本の印象は余り良くない様だった。

翌七一年、私の永年の夢であったフランスの女性誌「エル」が「アン」と云う名前で創刊された。それまで大型の女性雑誌は無かったので、大きな話題を喚んだ。順調なすべり出しを見極めると、私はやっとブダペストに来る事を決心した。

アカデミー哲学研究所の留学許可をもらって一年間のブダペスト滞在が決まった。何もかも捨てて、学生として鉄のカーテンの彼方へ行くと言うことで、皆んな驚いていた。学生生活は楽しかった、皆貧しかったから、私は自分を着飾る物をいっさい引き出しにしまい込み、貧乏学生風を装ったのも楽しい思い出。

七二年七月、突然、父が亡くなった。今と違ってあの頃は飛行機代がとて高く、急なことでお金が足りない。思い余って大使館に行って事情を話し、大使館のギヤランティをもらって航空券を手し、やっとの事で葬式に間に合った。あの時、私

を信じてギヤランティを出して下さった今は亡き上田大使の恩は忘れられない。

葬式が終わってもしばらくはブダペストに戻らず、母の許にいた。母と話をしている、父が彼の事を気に入っていたのを思い出した。「素晴らしい青年だから、まじめに付き合うなら良いが、そうじゃないと彼に酷だよ」と云っていた。ひよつとすると、あれは遺言だったのかと思つた瞬間、彼との結婚を決めた。何も考えず、誰の意見も聞かず、強引に結婚への道へ突つ走った。葬式の直後に結婚なんて不謹慎と云われたが、そんな事にお構いなしの私だった。立ち会い人には上田大使夫妻になつて戴いた。今から思えば、随分大胆な事をしたと思う。

結婚しても花の新婚生活と云うわけにはいかなかった。夫の作品は毎度のごとく、その台詞をカット、その場面は無しと政治局からの干渉が

入り、スムーズに映画を作ることが出来なかつた。やっと完成しても、いつ公開出来るのか、ひどい時には四年も五年も陽の目が見られない作品があつた。

反体制という烙印を押されて何度も悲しい思いをした。しかしその都度、きつと我々の時代が来る、表現の自由が来ると信じて頑張つた。

最近、時々、テレビで夫の古い作品が上映される。しかし、それを見ても、時代遅れの所がない。それはきつと彼の作品が常に真実を直視しているからではないかと思う。

その後、映画一筋だった夫は八九年に政治に新しい波を起こすべく政界に入った。「もう一人の他人（ひと）」（*A másik ember*、八八年公開）と云うブダペストの動乱をテーマにした夫の最後の作品が人々の意識改革をし、血を流さずにして共産主義を崩壊させた。八八年から八九年は私達夫婦にとって激動の一年だ

つた。権力に立ち向かうにあたって夫が真つ先に考えていた事は二度と五六年を繰り返さないと云うことであつた。彼はブダペストの動乱の年に高校生で、沢山の友達を亡くしていた。その史実を基にして作つたのが「もう一人の他人（ひと）」なのである。

彼と行動を共にしている間、「映画はただの娯楽にあらざ」と云つたトリュフォー監督の言葉を思い出していた。もしあの時、ホテルの小さな部屋でハンガリーの国歌を聞かなかつたら、私は今、何処に居るのだろうか。ふと耳に留めたあの曲が、私の心をゆさぶり続けるかぎり、きつと私は静かに年老いていかないと思う。

ハンガリーへ来た頃のこと

山地征典

二、三丁ごとに華美な門構えの中
華レストランが建ち、気の向くまま

に寿司も食えて、金さえあればハイカラなショッピングセンターで、生の海魚や色とりどりの輸入食品からコンピュータを始め園芸用具や建築資材まで、それぞれの好みに応じて簡単に入手でき、その気になれば不動産屋を通じてマイアミやスペインの海浜に別荘が買え、小学校から大学までコンピュータが完備されていて、インターネットで簡単に地球の裏側と繋がってしまうブダペスト。よく言えばグローバリゼーション、悪く言えばアメリカナイズの波に歯止めを無くして飲み込まれてしまったブダペスト。新しい歴史の出発による可能性の激的な拡大の恩恵に浴しながらも、百科事典の説明を頼り

に日本から送ってもらった種を播いて、蕪や大根、白菜を作っては数ヶ月掛りで食欲を満たしたハンガリーへ来た頃のこと、青春へのノスタルジーとともに、懐かしさをもって思い返されることがある。

大学でペルシャ語を専攻し、ペルシャの古代と文学に憧れていた日本を出る前の私は、本当を言うとハンガリーについてはリストの「プレリユード」や「ハンガリー狂詩曲」ぐらいしか知らなかった。大学卒業後、大阪の毎日放送で放送記者をしていた時に「プラハの春」や大阪万国博でチェコ人ホステスがカナダに亡命しようとして叶わず、大阪港から船で自国に強制送還された事件があつて（ナホトカからソ連経由ということ）、ハンガリーのお隣りのチェコについては私の頭の中の地図にもかたりの輪郭を持つようになつていたが、当時の私の関心はなんと言つてもイラン、中近東であつた。こうし

た中・東欧についての無知が反つて数年後に父親や周囲の人の心配をよそに呑気にハンガリーにやって来る原因であつたかもしれないし、住み着くことを心理的に可能にする一因であつたかもしれない。

一九七一年の秋に毎日放送を退職してテヘラン大学イラン文学研究科（外国人留学生博士課程）に留学。この留学が偶然に私の人生をハンガリーに結び付けてしまったわけであるが、そこで知り合ったハンガリー人女子留学生との結婚をきっかけにイラン留学を約二年で切上げて、一九七二年六月にテヘランからウィーンをまわつてブダペストへやって来たのである。以来、この六月で満二十七年。ハンガリーへ来た翌年の七三年の秋からはELTEの文学部で日本語や日本文学などを教える機会を与えられて、昨年大学から勤続二五年記念の金一封をもらうことになろうとは、パンナム機で羽田空港を発つ

た時にはまったく考えても見なかったことである。

毎日放送はハンガリーに来てから間もなく依願退職することになったが、当時健在であった民放の生みの親といわれた故高橋信三社長（後会長）には休職中も退職後も大変目を掛けて頂いたことが、感謝の念とともに思い出される。イラン留学中は取材班の手伝いや社長ご自身のイラン旅行の案内をしてベヒストーンやペルセポリスなどの古代遺跡やイスファファン、シーラーズなど、一介の留学生の身分ではなかなか容易に旅行をすることできない、首都テヘランから遠く離れた多くの史跡や古都を見て回る機会を与えて頂いたし、ハンガリーへ来てからも「あいつ何しているか見ていってやる」と言うことで、確かドプロブニクで開催された世界新聞記者会議に出席された後の帰り道であったと思うが、ブダペストにも数日寄って行

かれた折に、まだ、建物の壁に五六年動乱の銃弾の跡が生々しく残るブダペストの町を市電や地下鉄を利用して親しく案内させて頂いた。同道の常務さん、営業部長さんが息切れするのを尻目に七七歳の高齢とはとても思えぬ軽快な足取りでブダ城の石畳の上り坂を足早に上がっていかれた姿が懐かしく思い出される。斎藤守慶現会長にも武道思想の研究資料を寄贈頂くなど僅か数年間の在職の後、我儘に退職してしまった不義理にもかかわらず今日までご好意を掛けて頂いている幸いを改めて有難く思う。

結婚が直接のきっかけではあったが、ハンガリーへ来ることを思い立つたいま一つの理由は、妻を介して知ったハンガリーの東洋学への憧れもあつたが、それ以上に、かつとした日差しと脳みそまでが乾燥してしまいそうな荒漠なイラン大地の魅力が完全に自分を虜にしていたことを

白状しなければならぬ。イランへ行くには当然の事ながらハンガリーからの方が日本からよりはよほど近いので、ブダペストにおればいつでもイランへ行けると思ったのである。結局、ハンガリーへ来て間もなく、イランでは革命が起こり、今日までテヘランへの再訪は実現することなく過ごしてしまったのであるが。

ハンガリーに来てからハンガリー人、日本人を問わず、よく日本へのホームシックを尋ねられたけれども、不思議なことにイランで過ごした日々はよく夢に見ることはあつても日本の夢を見ることはこれまで殆どなかった。学生時代に母親をなくして、異国から母を思う「故国」への感覚が薄らぎ、また、夢想した人生の出発と、青春の愛を与えてくれたイランを懐かしみ、その延長として受け入れてくれたハンガリーに生きる中でそれは当然のことであつたかもしれない。

一九七二年六月一七日午前九時、知り合いから譲り受けたオペルの中古車を駆ってウィーンを出発、ニツケルズドルフからヘジェシユハロムと晴天の昼過ぎにハンガリーの国境を越えたのだが、行き交う車もほとんど無く、ハンガリー側はもろろんオーストリー側も、国境の町、それに僅か一車線の検問所も大変閑散としていたのを思い出す。

ハンガリー側国境の遮断機を通過して、検閲所のそれ程大きくない建物前の広場に駐車、車のトランクをあけて所持品のチェックを受けたのだが、検問所の傍に聳える機銃の据えられた見張り櫓と軽機銃を肩にかけた国境守備兵の姿が今も強く印象に残っている。

意外に親切な対応で、数分で簡単に入国手続きを終えたあと、妻の待つジエオールの町に向かった。妻はテヘランでの一年間の留学を終え、留学を続ける私をテヘランに残して、

出来ればテヘランに戻ってくる予定で前年の秋にハンガリーに帰国していたのであるが、結局私がハンガリーに行くことになって、そのための受け入れ準備を始めてからの約半年間、毎週一回内務省の女性担当官のところへ出向いては、家族環境やその他諸々のことを聞かれたという。ひよつとしたらこのことが反って国境での私の入国手続きを簡単にしたのかもしれない。テヘランのハンガリー大使館でもらった入国ビザも最初から無期限の居住ビザであった。当時西側の外国人と結婚したハンガリー人女性は国を出るのが通常であったところを、逆に夫のほうにハンガリーに來たいと言う意外なケースであったために、思えば七十年代にはいつて開放経済に向かう政治的な環境の中で格好のシヨウウインドウ的な事例として扱われたのかもしれない。

検問ゾーンを出ると、壁か生垣か

であったか思い出せないが、アスファルトの車道は急に両サイドが遮られて国境地帯の景色が車窓から見えなくなり、左右にくねくねとカーブを描く道をただ前方を見ながら対向車も無く独り走って行った。その時、初めて、閉じられた別世界に入ってしまったという緊張感が身体をはしり、思わずハンドルを持つ手に力が入ったことを思い出す。数分間で遮蔽は切れ、道はどこどころ並木の生えた人気の無い田園の一本道となり、のんびりとした風情の人々が行き交うジエオールの町に入る頃には、この緊張感も消えていたのだが、いまの広々と見晴らしよく、幾車線もこのゲートを持つ国境の近代設備を思うと本当に隔世の感がある。

さて、ブダペストの妻の実家に落ち着いて、ひとまず妻の勤めるハンガリー科学アカデミーの東洋コレクションに通って勉強することになったのだが、まず片言なりともハン

ガリー語が出来なければとハンガリー語の勉強を始めた。幸いにも、九月の新学期から当時の文化教育省が主宰する外国人留学生のためのハンガリー語集中講座に聴講を許されて、十週間に亘って朝八時から午後二時までハンガリー語の特訓を受けた。クラスには中近東や共産圏からの留学生のほかにも、私と同じようにハンガリー人を伴侶としてブダペストに住むポーランド人やロシア人の女性も数名いた。アラブ人の学生の中には親の職業を聞かれて、キングと答えたのがいたことを覚えている。前に書いたようにブダペストに着いて間もなく毎日放送は依願退職をし、ハンガリーで生活することに決めていたので、この時のハンガリー語の勉強には随分身が入った。クラス担任のレンドヴァイ・マーリア先生は三十代の実に熟練した親切な先生で、僅か十週間の勉強にもかかわらず、ハンガリー語の基礎知識を短時

日に身につけることが出来たのも、偏にこの時のレンドヴァイ先生の適切な御指導のお蔭げと、当時のクラス風景と共に今も感謝の気持ちで思い出される。

片言のハンガリー語が出来るようになってから最初にさせてもらった仕事はハンガリー科学アカデミーのアジア・アフリカ研究所のために科学アカデミー図書館東洋コレクション部にある日本語の学術雑誌を調査してアジアに関する社会科学関係の論文の内容を紹介することで、研究所のサーチ担当のセクレタリーをしていたホツスーネー、エルジーベツトさんの好意によるものであった。「アジア経済」とか数種の学術誌から何本かのレジユメを作ったが、良い勉強をさせてもらった。また、ホツスーネーさんの希望で、当時、物理学者である奥さんのハンガリー留学を機会にブダペストに来ておられた高崎経済大学の岩城博司先生をボ

グナール研究所長に紹介、日本からの文献寄贈のことなどを話してもらった。私も岩城先生のお持ちの本をお借りして経済学の手ほどきを受けたりした。アジア・アフリカ研究所でも既に日本との将来の関係を重視して、若手の所員に日本語も習わせようと考えていたようで、そのことで或日ホツスーネーさんの紹介で、研究所の指名する或所員に引き合わせられたのだが、彼女が趣旨説明を終わって席を立った後、急に当の所員は日経の英語版を取り出して、自分は今更日本語の勉強をする気はない、英語の資料だけで十分だと言い出し、大いに驚かされた。

当時はハンガリーに来たばかりで、このように平気で言を左右にするような場面にはなれていなかった。本当に面食らったが、ハンガリーでの生活を始めるにあたって大変いい勉強になった。後程、せっかく日本から送られてきた学術雑誌類も読め

るものがないと言う理由で東洋文庫のほうへ回されて来て、私がアンノテーションをした。

当時五十前後であったと思うが、瘦身で背が高く、ときばきと精力的に仕事をしておられたホッスーネーさんが急病でなくなられて、このことも間もなく沙汰やみとなってしまったが、その後この研究所は世界経済研究所と改称、また体制変換後日本・東南アジア研究センターという看板を所内に上げているが、もしこの時にホッスーネーさんの計画が実現しておれば、ハンガリーの現代日本研究も一味違ったものになっていたかもしれない。

アジア・アフリカ研究所のホッスーネーさんの他に私にとって忘れることの出来ない今一人の人はヨーロッパ出版のカリグ・シャーラさんである。カリグ・シャーラさんは、ご自身、詩人であると共にスラブ語圏各国の文学紹介を中心にアジア文学

の紹介にも大変力を入れられていた高名な編集者で、谷崎や川端、井伏それに永井荷風、森鷗外などの作品がハンガリー語に翻訳されたのもーに彼女のお陰である。彼女から日本文学の出版計画や原文との照合の仕事のほかには短編の翻訳や解説文を書く仕事を与えてもらい、文学活動の手ほどきをしてもらったのだが、足の踏み場もないほど本で埋まった彼女の書齋で本作りの話や文学論ひいては「民族は言葉にある」ということなど、文学を中心に多くのことを学んだことを忘れることが出来ない。谷崎の「瘋癲老人日記」のハンガリー語訳が一九七九年にゲンツ・アーパード訳で出たのもカリグ・シャーラさんの尽力の成果だ。カリグさんは今年の2月に八五歳で亡くなられたが、芸術家クラブのホールで、作家仲間やブルガリア友好協会などの皆さんの肝いりで催された彼女の八歳のお祝いにゲンツ大統領も駆

けつけてこられ、食事を交えて二時間余り懇談をされて行かれた。シャーラさんにいわれるままに彼女を挟んで大統領が左側に、私が右側に座ることになり、光栄な夕食会を経験させて頂いた。まだ八歳になられる前に、交流基金の文化人招待のプログラムで日本への招待の話が出たが、高齢と言うことで採用されず、大変残念に思った。私が「瘋癲老人日記」の訳文と原文を照合し、それに解説を書いたことを覚えて頂いていた劇作家・翻訳家のゲンツ・アーパードさんは、後に大統領として日本へ行かれた折りに訪日土産にもらって来られた「新潮日本古典文学全集」をご帰国後直ぐに日本学科にご寄贈下さったのだが、大統領ご自身からのお電話を受けて、大統領官邸へ車で受け取りに行った時、思いもかけずご夫妻でお茶のおもてなしを下さり、日本と韓国旅行の経験と文学の話などを小一時間ばかりお聞

かせ頂いた。翻訳で読んだ芥川作品から随分多くを学んだとおっしゃったのを覚えているが、その心のこもったお話し振りに触れて、文人大統領に対する敬愛の念と優れた文学の遺産を持つことの日本人としての熱い誇りの情がじんと体内を駆け巡るのを感じた。

話が体制転換後に飛んでしまったが、フリーランサーとしてアルバイト生活を一年余りした後、前記のように七三年の秋から ELTE で日本語講師として月三千五百フォロントの定収を得ることとなり、色々ご親切にお教え頂いた岩城先生に申し訳無く思いながらも、語学教師の道を選んだわけである。

さて、ELTE の日本語教育、日本研究についても書く予定をしていたのであるが、紙幅をはるかにオーバーしてしまつたようので、僅かに ELTE (Eötvös Loránd Tudományegyetem) がハンガリーの最も重要な教育・研

究機関で、一六三五年創立のヨーロッパでも有数の伝統を誇る大学の一つとして過去現在を通じ、多くの人材を排出してきたこと(因みに日本ではこの年、一六三五年に渡航のみならず帰国も禁ずる寛永十二年の鎖国令が出され、江戸幕府の鎖国政策がいつそう強められていくのであるが)、ELTE での日本語教育は一九二三年に東アジア民族の言語・文学講座設置に始まり、戦前、戦後を通じて、洪日辞書を作られた今岡十一郎氏や日本ハンガリー学の泰斗徳永康元先生それに歴史家の羽仁五郎氏の息女でコダヴィ方式の日本への紹介者である羽仁協子氏なども教鞭を執られたこと、一九七五年度から始まる交流基金の図書寄贈などによる背景作りが実り、一九八六年にハンガリーで初めて正式の日本学科が創設され(その運営に当たっては、八五年の秋に ELTE をご訪問された京都寂光院の小松智光御門主の八六年か

ら今日に至る小松基金ご寄贈による財源支援が大きな支えとなつている)、卒業生たちが大学や高等学校の教師を始め、国内、国外を問わずいろいろな分野で活躍を始めていること、特にこの秋から東京のハンガリー大使館はセルダハイ大使、ヴァイテルマンテル文化担当官、ヴァールコニ経済担当官と、かつての教子、卒業生が重要ポストを占めることとなつたことを記しておきたい。

日本語の専門図書も殆ど無い中で、毎年四、五十人も集まつた熱心な聴講生を前に、芝居の台詞のように、妻に手伝ってもらつて作成した九分一杯のハンガリー語の授業原稿を丸暗記して、何とか授業をこなしていった駆け出し教師の頃を思い出すと共に、優秀な卒業生の皆さんが日本語、日本学の知識を活かして、さらにハンガリー・日本関係の発展の深化に貢献されることを祈念し、摺筆とする。

ハンガリー二昔（ふたむかし）

サーライ美度里

教育心理学専攻の大学生だった私は、七四年の夏、ヨーロッパの教育研修ツアーに父といっしょに参加し、イタリアのモンテッソリの教育施設と、スイスのペスタロッチの子ども村を見学したあと、コダーイシステムのためハンガリーにやっ来て来ました。その時参加したバルトークセミナーでコチシュというピアニストの卵と知り合い、四年間の文通交際のあと、大学院在学中の七八年夏にハンガリーを再訪し、一ヶ月半滞在しました。そして、七九年一月にブダペスト大学（E L T E）の教育心理学科に客員研修員として、あとから振り返って見ると長いハンガリー生活を始めたのでした。

住んでみたハンガリーはいくらコチシュ家の中で守られてはいても、

びっくりすることがいろいろありました。

物価は今から思うと安くて安定していました。バスの切符が一・五フオリントでトロリーバスと市電は一フオリント。メトロには、アルミニウムの一フオリントコインを機械に落とし入れて通りました。電話はジエトンという専用コインを、郵便局で一フオリントと交換しました。ちょうど公衆電話を一フオリントのアルミコイン用に切換えているところでした。

タクシーは基本料金が八フオリントで、近いところは一五〜二〇フオリント、遠くてもだいたい五〇フオリント程で済みました。当時はタクシーの台数が少なく、乗り場にはいつも人が並んでいました。よく白ナンバーの普通車が、タクシーより安い料金で交渉しにきてお客を乗せて行きました。そのほか、アイスクリームは一玉一フオリント。ライオンシ

ュ（あげパンのようなもの。よく市場で売っています）は一・二フオリント。パンーキ口は六・八フオリント。国内郵便がたしか封書一フオリントで、ハガキは四〇フィレルでした。大学の研究室でコーヒーを一杯飲むときは、五フオリントを無人会計に入れ、町のピュツフェでは、コーヒーチケットを五フオリントで買って一フオリントのチップをそえてコーヒーと交換しました。カフェで座って頼むと八フオリントにチップを足して一〇フオリント払いました。

レストランは、少ない例外を除いてみんな国営でした。数も少なく、（、、、級とありましたが）高くはないけれどサーピスも味もイマイチでした。みんなレストランに期待せず、自宅の家庭料理で満足していました。

オペラ、バレエ、コンサートの文
化面は昔も水準が高かったのですが、

チケットの値段が安くても、いいチケットを手に入れるにはコネを必要としました。

ABCというスーパーマーケットにパンを買いに行くと、棚の上には昨日の固いパンしかないことが多く、カウンターの店員のところへ行くと顔見知りにはホカホカのパンをとり出してきました。肉コーナーもショーケースの中には古いものが多く、肉屋さんに希望を言つて、それがあれば奥から取ってきてもらい少しチップをあげる習慣でした。手に入れない肉を前もつて予約注文している人が多かったようです。

美容院へ行くと必ずシャンプーおばさんがいて、髪だけでなく耳まで洗うし、リンスが置いてないのでそれを持参せねばならぬりました（それで髪を伸ばして美容院に行かなくてもいいようにしたのでした）。シャンプー係にはチップを五〜一〇フォリント、美容師にはカット代五

〇フォリント、パーマ代一〇〇フォリントのほかにチップを一〇〜二〇フォリントあげていました。

コスメティック（エステ）はマニキュア、ペディキュア、美顔術、脱毛など日本より普及していると思われました。特にペディキュアは足のおそうじという感じで気持ちよく、みなさんにおすすめしました。

街の警官に道を尋ねたとき、私はたまたま親切にしてもらいましたが、警官に道を聞くものではない、と知人に言われてびっくりしました。

長期滞在許可証を持っていると、出国のたびに許可が必要で大変でした。まだ外国人の数が少なく、手続きは比較的早くすんだのですが、とても不自由な気がしました。ただ、当時のハンガリー人は三年に一度しか（オーストリアだけは一年に一度）西側諸国に出る許可がもらえなかったのと、許可手続きにも時間がかかり、また亡命を防ぐために家族そ

つての旅行は許可がおりませんでしたから、私の不自由さなどとりあつてもらえませんでした。私がウィーンや西ベルリンに行ったときは、西側でない手に入らない薬や楽譜、レコード、化粧品、果物（パイナップルやメロンなど）、手紙、銀行送金などいろいろ頼まれるのが常でした。

今だから言えることですが、心理学者の一家の亡命を手伝ったことがあります。上司が、モスクワ大学出身・ロシア人の奥さん・共産党幹部のユダヤ系教授という環境の下で、優秀な心理学者が不遇をかこっていました。彼の妻と息子三人が家族ばらばらに国を出て、ウィーンで落ち合いました。オーストリアに亡命手續する間、一ヶ月近くウィーンにいなければならぬだったので、ウィーンで会つて滞在費用を援助しました（返さなくていいと言ったのに、その後オーストリアに無事落ち着いてから毎月送金が届きました）。

兵役も今より厳しく、一年半と半年の二回徴用され、コチシュのいとこなどは身内のコチシュがよく西側諸国にコンサート旅行をするからという理由で、通信兵からはずされそうになりました。

男性の兵役義務と女性の出産育児休暇で両性負担のバランスがとれていると友人の社会学者が言っていました。がどうでしょうか。

七九年のハンガリーは社会主義の下で、物不足でも落ち着いていた最後の年だったような気がします。物は少なかつたけれど人々の気持ちや、生活はそれなりに安定していました。ブダペストの街は今よりすすけた感じでしたが、とてもきれいで静かでした。一人でどこでも歩き回ることができ、夜でも安心して出かけられました。道を尋ねるとついてきて案内してくれようとするので、かえって悪くて聞けませんでした。
慣れない土地でインフルエンザで

長く高熱を出して寝込んでしまったときには、毎日心理学の学生・職員が交替で看病についでくれ、何と感謝していいかわかりませんでした。

物質面でも、制度面でも不便なところは数多くありましたが、大学での学問と心の交流、お世話になったハンガリーの家族の親身な愛情だけでなく、触れ合うハンガリーの人々がほとんど例外なく親切・率直・善良だったので、そのあたたかい人間交流が多くの不便さを補い、この国を居心地よく感じさせ、慣れさせてくれたのだと思います。

八〇年一月の初めての公共料金値上げから人々の戸惑いや品物の増加・自由化・経済の活性化“gyeskedés”(ウジェシュ ケデー シュ、ハンガリー語で“ズルをして人よりうまく立ち回ろうとすること”とでも言ったらいいのでしょうか)がゆっくり始まっていったように思います。

体制転換を遡ること十年

佐藤 紀子

ハンガリー留学のために東京を発つたのは、「体制転換」の年を遡ること、ちょうど一〇年前、一二月の良く晴れた朝だった。当時の東欧への一般的なルートはモスクワを経由するもので、たいていモスクワ一泊、到着は翌朝というものだった。私は料金の安さから悪名高きアエロフロート機を選んだ。日本からの国費留学生に旅費は支給されなかったからだ。成田の空はあくまでも青く、私を乗せた飛行機は定刻通り離陸し、悪評などどこ吹く風という気分での旅の開始であった。

しかし、概して評判というものは真実を含んでいるものである。目指すブダペストに到着したのは、一日遅れの翌々日の早朝六時、それもフエリヘジ空港ではなく、プラハ経由

の夜行列車で東駅であった。

今では、信じられないことであるが、東欧行きのアエロフロート便はロシア語アナウンスのみ。「読み書き外国語」にしか親しんでいない私のような典型的日本人は空港ビルに大きく書かれた「プラハ」という文字を見るまで、ブダペスト空港に着いたとばかり思っていたのだから、おめでたいのも甚だしい。あの当時、大概の東欧圏の空港同様、プラハ空港も銃を抱えた兵隊が飛行機を取り囲むものものしい警戒ぶりで、張りつめた雰囲気か漂っていた。今まで政治用語として理解していただけの「共産圏」が、「恐怖の」という形容詞付きで現実となつて迫ってきた。これはもう、かつてテレビでよく見た「スパイ大作戦」の世界である。私はその中にポーンと一人放り込まれたような心細さを初めて感じた。こうして、私の留学生活は思つてもいかなかったショック療法で始まっ

たのだが、その後が続くハンガリーでの生活は、碎けた言葉で表現すれば「見ると聞くとでは大違い」の連続であり、先入観が吹っ飛んで行くものであった。

あれから二〇年、時にハンガリー人の強引さに辟易し、そのしたたかさに舌を巻き、そのルーズさに神経を苛立たせ、時にその人情の厚さ、親切さに心を暖められ、勇気付けられるという毎日を未だに送っている。昔から「ずばら」で「どんぶり勘定」の私であったが、ルーズさという点では、日本にいる方と接触する度に、朱に染まりつつある（染まってしまう）自分を感じる今日この頃である。

さて、今から二昔前は、まだハンガリーが「共産圏」、正確には人民民主主義国と呼ばれていた時代である。上等な（＝灰色で比較的柔らかい）トイレットペーパーから石鹸に至るまで、お気に入りの日常生活品はい

つもすぐに入手できるものではなかつたので、みつけると大量に買いこんでしまう習慣があつたという間にも身についた。後にこちらで結婚出産した際、ハンガリー人の親戚に頼んでウィーンから紙オムツの大箱をいくつも買ってきてもらったこともあつた。

食料品も肉類は豊富にあつたが、野菜・果物類は冬になると極端に種類が減り、零度前後の気温の中オレンジやバナナの屋台に並ぶ行列は、当時の冬の「風物詩」といえるものであつたかもしれない。今では、日本と同じように、バナナやオレンジを食べて幸福感を味わうことはないが、ハンガリーも二年めになると私も、行列に並んでやつと手に入れたバナナを食べていっばしに幸福感を感じたものである。初めてブダペストにやって来たのが二月だつたせいもあり、町全体が灰色にくすみ、シヨーウインドーのディスプレイ

も地味一色、なんと暗い町なのだろうと思つたことを覚えていいる。特に夜になるとオレンジの暗い街灯が途切れ途切れに闇に浮びあがり、気味悪さが余計に増していた。

時折パーティーがあるからと、いわゆる「反体制派」と呼ばれていた知人の家に呼ばれていくと、どこでも夕方から明け方まで何十人もの（老若）男女が入れ替わり立ち代わり出入りし、広い家中足の踏み場もないほどの盛況なのだが、なぜかやはり全体が暗い雰囲気一色である。テーブルの上にはワインやパーリンカ、ウオツカなどお酒や、各種のサラダ、ハム、ソーセージ、チーズ類が所狭しと並び、皆思い思いにグラスを持ち食べ物を皿にとつて、部屋のあちこちで数人の会話の輪をいくつも作っている。レコードからはピットルズやローリングストーンズの音楽が流れ、時にはピアノの弾き語りも入る。シャンデリアのほの暗い

灯りの下でする政治談義や最近出たサミズダート（地下出版物）の話題。東欧独特のアネクドート言い放題。

こういう時は最近のアネクドートを一番多く知っていて、面白おかしく話せる人が会話のスタープレーヤーである。しかし話題が話題であるから、どうしてもひそひそ話、あるいは深刻な話をぼそぼそすることになり、非常に盛り上がっていないが、なぜか暗い。一二時も過ぎる頃となると、ダンスが始まる。踊りに酔っている人もいれば、お酒に酔っている人もおり、さらには自分の話に酔っている人もいいる。八〇年代中頃までは、そんなパーティーが週末ともなるとブダペストのあちこちの家で開かれていた。

ところが春になると、ブダペストの雰囲気は一変する。町中の木にピンクや白の花が咲き乱れ、緑が眩しく、これが同じブダペストかと思ふほどであつた。町には、東ドイツ

など、他の東欧諸国からの観光客が溢れ、質素な中にも、華やいた雰囲気を感じられた。

ブダペストの人々は、当時も今も週末ごとにバラトン湖や郊外の別荘に出かけて行く。そういう意味では本当に勤勉である。別荘では休むというより畑仕事に忙しい。皆、花や果物、野菜などを作っているの、その収穫から保存、果てはワインや焼酎作りまで、本当によく働いていた。別荘も自分で作ると聞いて、大いに驚いたものだった。最近では、給料が安くて、自分の畑で作物を作らないとやっていけない、などという話をよく聞くようになったが、当時はまだそんな話は聞いたこともなく、どんな小さな別荘でも、畑仕事をしながら本当にゆったりとした週末の過ごし方で、ずいぶん羨ましく思ったものである。

七〇年代の半ば頃からと思うが、ツアー旅行や招待状があれば、毎年一

回西側諸国への観光旅行が許されるようになった。こうして夏になると毎年のように西側に旅行する知り合いも何人かいた。そういう人達は、西側旅行から別人のようになって帰ってきた。澆刺としてエネルギーシユ、自信に溢れ、颯爽と風を切つてあるくようになっていたのだが、しばらくすると元のハンガリー人に戻るのが不思議であった。やはり、西側諸国は、老いも若きも憧れの地なのかと思つたものである。

今も昔もこちらのお役所は威圧的であると同時に、大変気まぐれで、ゆっくりと時が流れているようである。事務手続きは、何度も足を運ばなければ完了しないようになっていらい。お役所に行く度にいやな思いをさせられるのだが、それでもハンガリーが嫌いにならなかつたのは、ハンガリー人の人情の厚さに触れたからではないかと思う。

プラハ経由でブダペストに初めて

やってきた時も、プラハの空港から夜行列車の中まで、見ず知らずの、しかも何も知らない日本人の世話を親身になってやってくれたことに始まり、ハンガリー人の親切さ、世話好きの例を挙げたら限がないくらいである。ハンガリー人と日本人の人情を比較して、「親切な日本人とは知人や友人に親切ということである。ハンガリー人が親切な人というのは知人友人に限らず誰にでも親切な人のことをいう」。親切なハンガリー人は見ず知らずの人に対しても親切である。

こちらに来てまもない頃、図書館で勉強していると、ある方が突然私のところにやってきて、どこから来たのか、なぜその本を読んでいるのかと質問を立て続けにあびせてきた。私の読んでいる本が目にとまったらしい。はるばる日本から来て、このテーマの研究をしてくれるのが相当気に入ったらしい。とうとう頼みも

しないのに、当時私の研究していたテーマの生き証人を紹介してくれたりした。

また、あつという間に知人・友人が出来て、毎週のように彼等を訪問し、食事をしたり、お茶を頂いたり、家族ぐるみで色々面倒を見てくれたが、それによって代償を要求されたことは殆どない。一九八二年に初めてのお産をこちらの病院でやったときも、同じ病室にいた方々がずいぶん助けてくれた。世知辛くなった現在のブダペストでは、もうこういうことはないかもしれない。

子供が生まれて六週間ぐらい経つと、そろそろ散歩に連れ出す。当時、コダーイ広場の近くに住んでいた私は、子供が保育園に入るまで三年間午前中三時間、午後二時間程度毎日のように子供を市立公園の遊び場に連れて行った。公園に連れ出してまもなくして、すぐに話し相手ができなかった。育児ママのグループである。今

でいう公園デビューは、好奇心旺盛で世話好きなハンガリー人ママ達のおかげで大変スムーズにいった。息子とはどこにいても誰がいても日本語でしか話さないようにしていたが、そんな私達を見ても怯むことなく育児ママ達は声をかけてくれた。息子が日本語を話せるのは、彼等には一言も理解できない日本語を話してもいやな顔一つせず暖かく見守ってくれた公園のお母さん達や親戚のおかげでもあると思う。息子の遊び友達の中には、日本語で息子に声をかける子も出てきたほどである。

留学時代といい、結婚してからのこちらの生活といい、「共産圏」という最初の強烈な悪印象はいつの間にか消えていた。「住めば都」というのだろうか。物不足でいろいろ不自由はしたが、フランス製のシャンプーを見つけたり、烏賊の缶詰を手できたというような些細なことや、大変な低料金でコンサートやオペラが

楽しめるというようなことが、小さな喜びをもたらしてくれた。また、幸運なことに「共産圏の恐怖」を感じたことも殆どなかった。八〇年代前半までは、まだまだ反体制的な言動は公にはできない雰囲気があり、パスポートをもらえず西側に出国できない友人もいたが、日常生活はゆったりとしていた。週末は親の家がレストランで食事というのがごく当り前であった。当時はまだ、家族の絆も強かったような気がする。

というわけで、ハンガリーに対して抱いていたイメージは、こちらにやってきてずいぶん変わったが、それ以後、ハンガリーを訪れた私の友人達は皆ハンガリーファンとなっている。

移住と引っ越し

相馬 笙子

私が初めてハンガリーを訪れたのは一九八二年のことだった。この時の強烈な印象が、その後毎年私をハンガリーへと向かわせた。満開のひまわりの黄色に見た大自然、共產主義の締め付けの中で人間らしく生きようとするハンガリー人、人々の心の底にある貪欲なまでの自由への渴望。これらはいずれも私に感動と同感とショックを与えた。

その後毎年夏はハンガリーを訪れる生活が続いた。八四年にハンガリー語の勉強を始め、仕事の傍ら、週一回ハンガリー語講座に通いつめた。それこそ寸暇を惜しんで勉強した。音楽指導のために始めたハンガリー語の勉強が昂じて、もつと現地でハンガリー語を勉強したい、ハンガリーに住みたいという願望に変わり、

知力、体力、金力諸々考え合わせ、五才で退職することにした。

私の退職に対する友人達の反応は次のようだった。圧倒的に多かったのが、「まだ一〇年もあるのにもつたいない」、次が「いいと思うよ。羨ましい。俺も（私も）やめたい」、三つ目は「やめてもらっては困る。やめないで」というものだった。「やめないでくれ」と言ってくれた人の気持ちがありがたく思い、「いいと思うよ。羨ましい」と言った人の気持ちを楽しく受けとめた。「もつたいない」という反応はいただけなかった。

三月退職、六月にはハンガリーへやって来た。予定は二、三年。退職金から三百万円を自らへの投資と考えた。

最初の一年、私は外国人のためのハンガリー語予備学院へ通った。レニングラード出身の検査医、ポーランド人の主婦、（旧）ユーゴスラヴィ

ア人のスラブ語の女性教師、神学を研究するオランダ人とスイス人の独身女性、ブルガリア人の主婦、そして私。七カ国七人のクラス。先生は二人。ハンガリー語によるハンガリー語の勉強。クラスメイトとの共通語も当然のようにハンガリー語であった。

二年目、縁あって、外国貿易大学で日本語を教える機会を得た。三年生の上級クラス。優秀な学生が多くいたクラスで、外国人に日本語を教えるということは、日本語を反対側から見直すことであり、私のハンガリー語の勉強に大いに役立った。又この国の人々の考え方や習慣、文化を知る上でも役立った。三年目の八年五月、私は帰国し、離婚。家の売却を済ませ、九〇年九月、永住の目的で再びハンガリーへやって来た。最初の家を購入したのは九一年七月のことだった。売主の奥さんのこの家売るのを決めるまで三日間泣

きました」ということばが私の心を動かした。

エクспレスという広告新聞を見て電話し、二〇軒位見て歩いた。探すポイントは空気のきれいな所、近所付き合いのよさそうな所、交通の便の比較的良好の所であった。理想的な家が見つかり七年間そこに住んだ。一二軒の共同住宅、二・五部屋、庭もあり、バス停まで三分、屋上からの素晴らしい眺め、家の前に三角の草もあきない楽しみひとつだった。同じ年八月に永住許可がおりた。健康、教育、収入（又はある程度の財産）の三点がそろっていることが条件だった。私の場合はこちらで仕事があったこと、預金があったことも、許可が容易におりた理由であつたらしい。

九二年からセグドの大学の専任講師になり、九八年まで七年間勤めた。週一回泊りがけて二日間、汽車とバ

スで往復七時間、かなりハードだったが、まじめな学生が多くなかなか辞められなかった。セグドは学生の町で、大学の回りはどこを向いても学校ばかり。町を歩いている人も、八〇%は学生。いい雰囲気の町で、同僚たちもみない人達で、往復のハードさを除けばもつと続けたい仕事だった。給料は最後の年で手取り三万フォリント弱。殆どボランティア。お金のためにやる仕事ではなかった。格好よく言えば、「そこに日本語を勉強したい学生がいたから」ということになる。

九七年、前よりも大きい家を購入した。常に一部屋を客間として空けていたため独立した仕事部屋がほしくなった。現在の家は百二 m、四部屋、広い庭付き。ちよつと高かったが、警察直行の警報機などついていて、色々便利で、環境も気に入っている。地上階なので、庭は殆ど私の物という感じである。

最初の家は二年間、借り手がつかなかったもので、売却した。今、もう一軒建築中で、私が前からここにこんな家を建てて住みたいと思つたとおりの家ができそうである。越したら、老後に備えて今の家を貸そうと思つている。

最初の家の購入には他人の助けが必要だった。二軒目は殆ど一人でやった。そして今三軒目。この間、四軒目の家を建てている夢を見た。お城のような白い柱の石の家だった。この夢は実現しそうもない。それにしても私は引越しが嫌いではないようである。これは父からの遺伝であるようだ。なにせ私のきょうだいは三人とも違う家で生まれたのだから。

心動かされたこと

天野明

購入したばかりのベンツ車を駆って Salgotarjan に向かったのは一九八七年一月、駐在して初めての冬。走るそばから窓に氷がバリバリ張りつき、随分冷え込んでいるなと思つたとたん、突然ハンドルとブレーキが利かなくなり、道路の傾きに従つてスローモーションのように側溝から畑に突っ込んでしまった。

路面は全く凍っているように見えないのに下りてみるとツルツルというよりヌルヌルという感じで、歩行も思うに任せないほど。結構飛ばしていたので「対向車が無くても良かった。けれどこちらの人はこういう日には運転しないのかも知れぬ。その場合当分助けは来ないかもしれない。こんなところで遭難してしまうのかな」等と思案を巡らせているところ

にソロソロと何処かの会社のミニバスが通りかかった。と、中から四五人背広姿の男性が下りるや、二言三言相談するといっせいに車を押し上げてくれた。泥濘の中での悪戦苦闘が終わり、ほっとして車から出て握手を求めると、手が泥で汚れていると言つて首を振つて笑顔を見せてくれた。見ると、靴や着ているものもタイヤから飛んだ泥ですっかり汚れていた。走り去るミニバスを見ながら、どうしてこんな事が出来るのだらうかと暫く呆然としたことを今でも鮮明に憶えている。

その時以来、女房と幼い子供二人が道に迷い日が暮れてしまった時長い道程を肩車して送ってもらつたこと、財布を湖岸に忘れた時中に入っていた子供劇場の切符の日付に間に合うようにと我が家まで届けてくれた人、家族旅行でパスポートを忘れたにも関わらず国境を通してくれた国境警備員などなど、数えられない

程暖かい思い出をハンガリーの人達から頂きました。それまでは仕事上の効率やビジネスの成功だけしか人を計る尺度を持つていませんでしたが、もっと大切な別の世界のある事を教えて貰つたと感謝しています。

九四年三月に帰国するまで東欧革命を挟んでの六年一ヶ月。長いようでもとても短く感じました。皮相な見方かも知れませんが、初めて訪問した当時のブダペストの印象はマクドナルドの無いしつとりとして落着いた美しい街。人々はしかし額に縦皺を寄せやや俯き加減に歩いていました。政治的自由と資本主義経済を同時に獲得した変革は年金生活者の大きな犠牲と経済マフィアの跳躍を齎しましたが、人々の表情は明るく自信に満ちたものに変わつていったと思います。外国人の我々がこの過程に直接参画できた訳では勿論ありませんが、貴重な歴史的瞬間に居合わせ、日々の生活の中で歴史の転換

を感じる事ができたことは本当に
幸せなことでした。

現在、二回目の駐在地ロンドンに
来て丸一年が経ちます。比較するの
はおかしいのでしようが未だ心躍る
ような経験に出会ってはおりません。
私の出会った素晴らしいハンガリー
がいつまでもその良さを失わず、在
日日本人の方々が私のように少しで
も楽しいハンガリー生活を体験でき
るよう祈っております。

最後になりましたが、ドノウ通信
を一〇年間に亘って続けてこられた
鉄人盛田先生に敬意を表すると共に、
大変でしょうがこれから是非永く
続けて頂けるようお願いします。

子育てと子供の葛藤

天野 真理子

二・三歳の年子を連れ、初めてフェ
リヘッジ空港に降り立ったのは一九
八八年六月の事だった。六年間ハン
ガリーで暮らした私達は、ハウスク
リナーやベビーシッターのお姉さん
に恵まれ、同年代の子を持つ母親同
士の連帯のおかげで、手のかかる子
育てをほとんどこの期間に終え、気
付いた時には我が子は大きく育って
いた。

ハンガリーのオボダ(国営幼稚園)
に一、二年、そしてインターナシヨ
ナルアメリカンスクール三・五年と
ハンガリー語、英語の教育環境に身
を置き日々楽しそうに通う我が子を
見て、国際感覚を身につけた子に育
ち、駐在は有り難いと思つたものだ
つた。彼らはアメリカンスクールで
習う富士山、新幹線に代表される日

本に憧れ、ハンガリーの公共バスの
中で、補習校で習った君が代を大声
で歌い、自分の母国に彼らなりのイ
メージで郷愁と誇りを持っていたよ
うだ。八、九歳で帰国した時は大層
興奮して、一二時間の搭乗中一睡も
できなかった程だった。

それから四年、日本の公立小、中
学受験、私立中学、さらに熟通いを
経験し、親の目からはすんなり順応
した様に見える彼らに、「子供の適用
性は大人には真似できない程優れて
いる」と感心し、また安心したもの
だった。

しかし、昨年二月、主人の二度目
の駐在の話が出ると、中学受験を経
て日本での居場所を見つけ、心地好
く感じ始めていた上の子は同行を拒
絶した。両親の一八歳までは「一緒に」
というしつこい説得にも拘わらず、
首を縦に振らず泣きわめくばかりで、
一方学校の先生や友達には自分の心
境を訴えていたらしい。その友達の

親から「お嬢さんはうちの子にもう二度と帰国子女にはなりたくない、と言っているそうだ」と聞いた時は親に言えず、一人心中で異文化に適応する為の葛藤を続けてきた娘の心の叫びを初めて聞いた気がした。

日本で生まれ育ち、はつきりと根を下ろした母国を持つ私達親と、異国で暮らし母国に憧れながら育った彼らは、母国と教えられた国に帰っても根を張ることができず、周りの顔色を見ながら自分の居場所を必死で探していたのかもしれない。インターナショナルの世界で、八、九歳まで育った彼らは、もうすっかり自分の色、価値観を持っていただろうに…。

それでも私達両親の結論は、同じ住環境で彼らの成長を見届け、また様々な経験を共有することで親子共に学び合えると確信し、半ば強引に当地イギリスへ連れて来た。今は違和感無しに（私の目には…）現地校

に溶け込み、又週一回の補習校をとっても楽しみにする、というハンガリー同様の生活パターンが展開されている。

私達親には計り知れない苦しさを味わっている彼らを、今後も側で見守り、又時に対等に扱い、じっくり話が聞ける関係が続ける事が私達にできる唯一の事の様に思う。これらの経験が彼らをより逞しく、また他を思いやれる懐の大きな子に育ててくれればと、今は願うばかりだ。イギリスに來た事で、今彼らの何よりの楽しみは第二の祖国、ハンガリーを訪れる事である（以前はハンガリーへ「帰る」と言っていたが…）。

私の学生時代

萩原 淑子

私はハンガリーに、まだ政治改革以前の一九八三年に留学しました。中学を卒業してすぐに留学した私にとって、リスト音楽院で過ごした七年間が「学生時代」といえます。

親の目を離れて自分の思う通りにできる解放感を満喫する一方、ハンガリー語での授業に四苦八苦する毎日でした。授業の合間にヴァイオリンの練習をするのが日課で、朝から晩まで学校に入りびたりで、まるで学校に住んでいるようなものでした。

一九八三年から八九年まで、まだ社会主義の時代でしたが日に日に鉄のカーテンが開く兆しが感じられ、芸術家にとっては色々な可能性が広がる活気あふれる時代でした。そんな雰囲気ガリスト音楽院にもあふれていたように思います。

ケルターク・ジュールジュ、ラドシユ・フエレンツ、シモン・アルベルトラが後進の指導に力を入れる一方、ハンガリーの音楽界を代表する音楽家コチシュ・ゾルターンも教鞭を執っていました。その当時まだ三〇代前半だったコチシュはまるで学生たちのがき大将のようでした。奇妙な日本語を話す彼に、まだ一六歳だった私は目をみはるばかりで、彼らの話すことは半分も理解できませんでした。それでも音楽院が閉まった後もピアノやヴァイオリンを弾きながら皆と一緒にふざけていた時間は、私にとって今でも貴重な財産です。

学校に下宿していたも同然の私を、音楽院の受付のおじさんや鍵を管理するおばさんは、親のように目をかけてかわいがってくれました。空いている部屋をわざわざ私のためにとっておいてくれたマンチおばさん”や、ロビーでぶらぶらしていると”ちやんと練習しないとだめじゃない

か！”としかりにくるアル中の“赤毛のゾリおじさん”がいなかったら、きつとひどいホームシックにかかっていたにちがいありません。

よくまだ社会主義の時代に留学して大変だったろうと言われます。もちろんバナナが買えない、お醤油が無いというような物的不足があったり、遊ぶところもあまりなく地味でした。でも日本ではとくに克蘭ク・インされた待ちに待った映画を半年おくれで皆で見に行ったり、政治的理由で禁止されていたハンガリーやポーランドの映画をこっそりビデオで見たり、振り返ってみると楽しい思い出がいっぱいあります。

私はいま本拠地をザルツブルグに移し生活していますが、ハンガリーは文字通り第二の故郷で、ハンガリーに帰って昔の仲間と演奏することは、私の演奏活動に欠かせないものです。

私はハンガリーのブダペストフェ

ステイバルオーケストラに半契約という形で所属しています。こうして西ヨーロッパで仕事をした後ハンガリーにもどると、ハンガリー人の特徴がいっそう強く目につきます。どこか子供のようなところがあり、オーケストラのように集団行動をとる仕事になると、それぞれの主張が強すぎてまとまりがなくなってしまうのです。日本だったらもちろんのこと、ヨーロッパでも大問題になるところですが、最後の最後にはそれまでのことはけろっと忘れて、皆一緒にもりあがってしまうハンガリー人に、彼等の性格に慣れない人ははらはらさせられことでしょう。

文化予算が年々削られ、音楽家にとって状況はけつして楽ではありませんが、ハンガリーにとって芸術家が大きなパワーであることに変わりはなく、私もゆくゆく少しでも恩返しができるばと思っています。

ハンガリーとのお別れ

八幡 富美雄

この原稿がドナウ通信創刊一〇周年記念号に掲載される頃には、私は

今回の二度目のハンガリー勤務を終え、既に次の任地に到着しているか、又はそこへ向かおうとしていることであろう。最初のハンガリーでの勤務が一九七九年の夏から八五年の夏までの六年間、今回が九六年一月から九九年七月までの三年弱、この間、このドナウ通信を読んでおられる多くの方々にたいへん御世話になり、この紙面を借りてお礼を申し上げます。

私の一回目と二回目のハンガリー勤務の間、つまり私がハンガリーから離れていた間に、この国ではたいへん大きな出来事があり、それを世間では「体制転換」という仰々しい言葉で呼んでいる。従って、私は、

家族と共に、この「体制転換」の「使用前」と「使用后」を比較する絶好の機会を与えられたわけであり、人はこれを貴重な体験と言いい、どのような変化を最も敏感に感じたのかとしきりに尋ねてくる。

この質問に対して、私は職業柄（大使館勤め）、ハンガリー語で思いつく限りの美辞麗句を酷使して、「体制転換」のすばらしさを切々と述べることが多い。もちろん、過去の共産党独裁時代のハンガリーにノスタルジーを感じている人に対しては、例えば治安の良さといった昔の良い面もちりばめることを忘れない。政治制度が変わり、経済制度が変わり、消費生活が豊かになり、あらゆる面で自由が謳歌できるようになり、治安が悪くなり、犯罪が増え、外国人の数が増え、等々、表面上変わった点を数え上げたらきりが無い。

でも、政治や経済の仕組みが変わったからと言って人々の心まで変わ

ることはなく、ハンガリーという国、そしてこの国の人々は、私が七九年に初めてこの国を訪れ、二〇代後半の多感な青春時代を過ごした頃から、自他共に認める中年おじさんとなった現在に至るまで、殆ど変わることなく、たいへん優しく包み込むように接してくれている。こんな素晴らしい国で一〇年近くも生活できたことを雇い主である日本国政府に感謝したい。

多分、この国での勤務はこれが最後となるであろうが、この国の人々が、今後再び体制が転換しようがしまいが、今まで通りの寛容さ、優しさを持ち続けてくれることを願ってやまない。

さよなら、ハンガリー！

A viszontlátásra!

嗚呼、「ハンガリー」雑感

伊桜誠

ドナウ通信の創刊一〇周年の折、盛田先生から何かハンガリーについてみなが知らないようなことを書いて欲しいと電話で依頼があった。日頃、筆無精を決め込んでいるが、断れない。盛田先生には本省東欧課でハンガリー担当をやっている時にもお世話になっている。

さて、八九年の改革騒ぎから一〇年が過ぎたが、当時、社会主義体制が崩壊しようとは、誰が予測し得たであろうか。ポーランド、ハンガリーに対する改革支援は、八九年のアルシュ・サミットで火がつき、政治、経済改革が後戻りしないよう我が国も応分の協力を約束した。ハンガリーの国名が新聞の一面トップに躍ったこともある。野球の試合でもないのに、米、EC他、西側諸国による

資金、技術協力など、支援策競争に關するスコア・ボードなるものが存在した。それから五年以上も東欧課で勤務したが、実を言うと改革支援もさることながら、ハンガリーとの二国間関係では、これまでの積み残し案件の処理の方が大変であった。政治協議、科学技術協力協議、官民合同文化委員会の開催や、国際交流基金事務所、ジエトロ事務所、ハンガリー生産性本部等の開設若しくは設立、更には、協力隊派遣取極、査証免除取極、航空協定の交渉・締結などなど。ハンガリーが社会主義を卒業するというところで、改革支援という御祝儀を出した訳であるが、加えて、それまでお付き合いの薄かった分、一挙に原状回復も求められた。今は亡きアンタル首相の時代、閣僚の半分以上が我が国に遊びに来た。しかも、大蔵大臣などの経済閣僚は年中交替し、その度に新閣僚がやって来る。従って、閣僚クラスを訪日

など日常茶飯事となり、外務省の廊下で石を投げればハンガリー人に当たる程であった。ゲンツ大統領も即位の礼に出席するため訪日、成田から迎賓館まで自衛隊のヘリコプターで送り届けた。癌と闘っていたアンタル首相、夫婦でスキーが得意のイエセンスキ外相の他、今となっては名前を思い出せないが、とうとう国防大臣までやって来た。「昨日の敵を今日の味方と言われても実戦部隊は納得しない、何故受け入れが必要か説明が困難」などとしながらも、防衛庁は習志野演習場の視察もアレンジ、手厚く歓待してくれた。八九年の秋に国境を開放、東独人を逃がし、ベルリンの壁を崩壊させたネーメト首相も、首相退任後、村上参議院議員の招待で訪日、銀座や熱海で「めっちゃくちゃな」歓迎を受けた。宮中、総理官邸はともかくも、ハンガリー要人による国会や大臣室詣りなどは年中行事化しており、通訳

業務でも忙しい思いをした。駐日大使の信任状の奉呈式などで、陛下の通訳をすると大蔵省財務局から四千円ももらえるが、通訳の心得としては、厳粛さを演出するあまり、やたらとその場の緊張感を煽ったりしてはいけない。

当時の私は、朝から新聞記者の電話攻撃に曝され、駐日大使による支那要請を目的とした外務省幹部へのお百度参りが原因で、文字どおり寝食を忘れることを余儀なくさせられた。ハンガリー側の総理、外相宛親電、親書の乱発もさることながら、駐日大使があまりにもうるさいので、在京大使館の次席が交替する時に二人纏めて油を搾ったらゴッド・フリーザーというあだ名を頂戴した。しかし、首のかかっていた駐日大使は、アンタル首相の急病と入院、交通ストの拡大に起因する本国の政情不安にシヨックを受け、気の毒にも重度の顔面神経痛に陥ってしまった。私

の方は、深夜勤務とタクシー帰り、休日出勤をせつせとこなし、最後はそこでの仕事に飽きてしまい、追いつがる課長に鉄槌を加えて何とか東欧課を脱出した。大臣秘書官室にも国外逃亡の挨拶に行つたところ、半分冗談だとは思うが、「今になっていなくなるとは、けしからん」と叱られた。日・ハンガリー友好協会の会長を長年務めている河野自民党総裁が大臣になったばかりで、それまで党本部に押しかけるなどして、ハンガリー人と一緒にさんざん迷惑をかけ続けていたのだ。自民党本部の井桜さん、愛媛県の御出身とか、お世話様でした。因みに、その頃産声をあげた白髪は今も元気に繁殖している。外務省は人使いが荒いので、人事院から睨まれているとか。残業代もまともには払ってくれないので、ボランティア精神が大切である。

最も進展した。最近では、政府間の政治関係から、むしろ民間の経済及び文化に重心も移行した。今後は、国民各個人は勿論であるが、地方自治体の姉妹都市交流や友好協会等に代表される民間団体の協力関係が主役を担うであろう。かくして、糠沢大使には年中ドサ廻り、…ではなく、地方都市への出陣をお願いしている。そもそも、政府間の関係促進という仕事は、国民相互の友好、親善、協力関係を促進するためにサーヴィスを提供することが本質であり、それを故にこそ存在意義がある。もっとも、何のためにハンガリーとの関係促進に国民の税金を投入するのか、という別途の考慮も時には必要とかなうたら、また叱られるのであろうか。改革支援の話は別にしても、国際社会で我が国の味方をしてくれる国も欲しいし、ハンガリーは、教育、文化大国であるためこちらが学ぶことも多い。他方、ハンガリーでの日本

語学習人口は、小学生を含め千人を数え、ハンガリーからの国費留学生の受け入れ数も近年は二〇人以上を越える。何だかんだで、大使館の建物、人員、予算規模も拡大した。私も確信犯とは言え、そうした事態を招いた張本人のひとりであろう。

職業病か、役人根性なのか、はたまた、貧乏性のなせる業か、大使館業務の広報活動と自己宣伝に走っている気がする。ハンガリー語の人員不足のせいで人事異動がきかないためか、不徳のいたすところにより他では使いようがないのか、私は自らの二〇年にわたる外務省勤務のうち、一五年近くをハンガリー人のお付き合いに費やした。さりとて、我にかえって見れば、ハンガリー人の目から、現在の我が国はどう映っているのだろうか、考えない訳にもいかない。一般の国民にとっては、未だに伝統文化、先端技術、異国情緒が魅力なのではないだろうか。然ら

ば、政府サイドはどうか。ハンガリーは、選挙の度に与党が負け、政権が交替する。今度の政権は、良くは分らないが、うるさくない代わりに、これまでいろいろと遊んであげたことを忘れたのではないかとの疑いがある。アンタル首相が逝去した時は、政府の派遣特使まで出している。良くは思い出せないが、オルバーン首相だつて遊んであげたはずだ。中・東欧環境センターに一時期百七十万ドルも拠出したのも、ハンガリー政府とハンガリー人であった初代所長がうるさかつたからだ。駐日大使として赴任予定のセルダヘイ氏には、我が国からの借金が原因ではあるにしろ、ハンガリー経済が自転車操業で大変な時期に、助けてあげた恩を忘れないようにと言っておこう。ついでに、海部総理がハンガリーを訪問した折、私がアルバイトでこき使った時の個人的恨みについてには忘れるようにと。

ハンガリーとの関係が進展した理由があるとすれば、それは何か、そろそろ本題に移り、自説を展開したい。しかし、休暇帰国という重大な任務の遂行、要すれば家族サーヴィスを控え、時間的余裕もないので、次の機会に譲る。最後に、ブダペストの大使館を脱獄して、ゴルフ天国、マニラに逃亡する八幡先輩にエールを送ろう。ブダペストでは、二回の在勤で八年近くも一緒に暮らしているので、お互い顔を見るのもいやなのであるが、毎週一緒にゴルフをした。地方では泊りがけでやった。当地赴任前は、互いの勤務地であったワシントンとアトランタでも一緒にやった。ここには殆ど同じ時期に着任したのに、先に逃げられた。油断は大敵である。私はただでさえ人事異動が少ないのに、どうしたもので…。嗚呼、また、ハンガリー人が呼んでいる。イザクラ・ウール！

第二部

歷代大使・公使・令夫人篇

「ハンガリー民主革命

十周年」に寄せて

ハンガリーの想い出

関 榮次

ブダペスト在留の皆様、今日は。

いきなり仰々しい書き出しでごめんなさい。

ベルリンの壁なんとかのと、はじめるべきかも知れませんが、私はソ連共産主義体制の終えんに主役を演じたのはハンガリーと信じて疑いませんので、当時の東ドイツに焦点をあてるような表現を好みません。

私は外務省にいた間に、八カ国で計十一回勤務しました。そのうち、自らひそかに希望していてたまたまそうなり、勇んで赴いた任地よりも、あまり釈然としない気持ちのまま着任したところの方が、かえって結果はよかったということがありました。ブダペストもその例で、最たるものでした。

というのは、一九七〇年のはじめ、明るく自由なベオグラードから訪ねたときのブダペストの雰囲気があまりに暗かったこと。そして、共産主義の国ではろくな仕事があるはずもないと一つ覚えだったからです。それはとんでもない見当ちがひ、認識不足でした。

一九八九年五月、私は壮大な歴史のドラマの舞台のまえに立っていたのです。その数年前、ロンドンでゴルバチョフとサッチャーの対話という前奏曲を聴いてはいましたが、よくわかりませんでした。

ブダペストでの三年あまり、私はそのドラマに夢中になり、そんな機会に恵まれたことを感謝しつつ、せつせと毎日批評を書いて東京に送りました。そのころはじめて、ニューヨークで安月給のころ転職しなくてよかったなあ、と思いました。

また、外国の同僚と集まると、こんなときにハンガリーでお勤めとは、

われわれは運がいいよ、冥利につきるではないかと、よく語り合ったものでした。

役目柄、相手の国に情情的にはまりこみ、適切な判断ができなくなるのを自らいましてはいました。しかし、現実にはそれはなかなか容易ではありませんでした。多少の差はあれ、いつでも判断は情熱をとまなう一つの選択であるからです。判断する人の体験と信条がかならずにじます。

とくに、青少年時代に戦前、戦時のあまりに非合理的な国家主義体制を味わった私にとって、狂暴な全体主義、非民主的な圧制に苦しみ、それをはねのけようとして立ちあがったハンガリーの民衆を目の前にしたとき、彼らの外にいることはむずかしく、いつとはなく彼らの間へ入ろうとする自分をおさえることができませんでした。そこには、いつも戦前・戦時の暗い祖国の姿が投影されてい

ました。

ちょうど十年前の一九八九年。十月二十三日、国会議事堂正面のコシユート広場で、ふたたびハンガリーは民主的な共和国に生まれ変わったとおごそかに宣言されました。

そのときの民衆のあの興奮と熱気につつまれた広場の情景。私も広場の真中で彼らとともに立ち、彼らのよろこびをわかちあっていました。そのときのことは、いまでも脳裏に深くきざまれています。

また、その年の六月、ナジの再埋葬の儀式のときにもハンガリーの人々に同情と連帯をはっきり表すために、私はわざわざ外交団席の最前列に立ちました。でしゃばりすぎるとのお叱りを東京からいただくかも知れないことは、もちろん覚悟のうえでした。ナジは一九五六年十月、ハンガリー動乱のときの首相であり、そのあと悪逆冷酷な共産主義者たちの手で非命にたおれた悲劇の主人公

でした。

私はそのようないくつかの歴史的な場に身をおくことができた幸運にいまでも感謝しています。終生忘れることはないでしょう。

それにしても、ハンガリーがソ連共産主義体制の崩壊に果たした役割はきわめて大きく、もし共産圏にハンガリーが存在しなかつたら、共産主義の壊滅があつたとしても、ずっと先のことになつたと思います。

ハンガリーの動乱で撃ちこまれた一発がソ連の致命傷となり、一九八九年十一月九日のベルリンの壁の崩壊をもたらしたのです。ハンガリーの「同志」を武力と憎しみで圧伏したことで、ソ連は自らの存在の論理的な基盤を失ってしまいました。

この反ソ武装蜂起でハンガリーの人々が支払った血と涙の代償はきわめて大きいものでした。私たちは彼らがなめた辛酸と彼らの歴史への貢献をわすれずに、正当に評価してあ

げるべきだといつも思っています。

ところで、私の在任中はまだ日本企業の投資家はニューヨークのロックフェラー・センターを買つても、とてつもなく長いトンネル式の酒蔵にいっぱいつまったハンガリーのワインに投資する話には興味をもちませんでした。やっぱり、フランスの業者はこれで儲けたようです。

一九八九年の末、スズキ自動車のハンガリーへの投資交渉は最後のヤマをむかえていました。もうダメかも知れないと思つたときもありましたが、鈴木修社長の将来への展望に基づいた説得力のある構想、即断即決・粘り・迫力の陣頭指揮で交渉はまとまりました。私はブダペストで真の経営者に出会いました。

同社の技師たちは全土を駆けめぐつてハンガリーの機械工業を徹底的に調べあげ、ハンガリー政府よりも情報をもっているといわれたほどでした。マジヤール・スズキの今日み

るような成長は理由のないことでは
ありません。

デブレツェンのリジンと、シャル
ゴリアンのグラスウールの製造工
場建設案件もいろいろ紆余曲折はあ
りましたが、りっぱに立ち上がり利
益を生むようになりました。それも、
北村恒夫トーマン社長の先見と英断、
そして、そのほか多くの方々の献身
的な努力があつたからでした。

一九九〇年一月には海部首相と中
山外相の公式訪問がありました。日
本の総理大臣のハンガリー訪問は史
上はじめてでしたが、両国の関係を
さらに緊密にするのにたいへんよか
つたと思います。

ブダペストには、もう一つ、私の
余生を左右するような感謝すべき画
期的なことがまちうけていました。
それは、障害者のために私財を投入
して献身的な活動をしておられる村
井正直博士との出会いでした。

先生にはじめてお目にかかり、と

ても謙虚なお話をしばらくうかがつ
ているうちに、この方は日本のシユ
ワイツ博士だと感ずるようになり
ました。

村井博士はハンガリーのペトウー
博士が一九四〇年代のはじめ考案し
た脳性麻痺障害者の集団的教育療法
を日本に取り入れ、現在では北海道
と大阪の四つのわらしべ園の施設で
乗馬、柔道なども加味して療育効果
をあげておられます。

やがて私はボランテニアとして村
井先生のお手伝いすることになりま
したが、そのことを通じて社会への
接点がふえ、とくに本年九月に北海
道浦河で開かれる第三回国際ペトウ
ー学会実行委員会や全日本障害者乗
馬協議会顧問として、いそがしいけ
れども充実した日々を送らせていた
だいております。少しでも天に宝を
積みめれば幸いなことと感謝です。

英国ではずっと以前からペトウー
療法が導入され、英国政府もブダペ

ストのペトウー研究所に多額の資金
援助をするなどして支援をおしまま
せん。去る三月十日、英国障害者乗
馬協会名誉総裁であるアン王女が大
阪わらしべ園を訪ねられ、一時間以
上も熱心にご視察になりました。そ
れは関係者にとり大きな名誉であり、
よろこびでありました。

障害者療育の分野で日本・ハンガ
リー・英国の間での協力が深まって
いますが、いまでは村井博士らの尽
力でペトウー療法がわが国から中国、
韓国、香港などアジア地域にひろが
りつつあるのはうれしいことです。

ハンガリーの三年あまりには、想
い出がいっぱいつまっています。

あの美しい国立劇場のすばらしい
オペラ、その歌手たち。リスト音楽
院のコンサート。小林研一郎先生の
名指揮。ハンガリーの人たちは「わ
れわれの小林」と呼び、日本人では
ないと言わんばかりでした。夏のマ
ルトンヴァーシャルでの先生指揮

のベートーヴェン音楽会。

ハンガリーの友人とのおつき合い。彼らの心のこもった手作りのおみやげ。外国の同僚たちを招待したり、招待されたり。新生ハンガリーをのぞいてみようと、切れ目なく訪れるお客さん。勉強熱心な邦人新聞記者との談論。それはいまもつづいていきます。

かずかずのワインの銘酒。エゲール・トカイ・シャーロシュパターク・シヨプロン・バラトン湖とその周辺などへの旅。大平原とカウボーイたち。その妙技になるほど騎馬民族の未えいと感心しました。

乗馬の練習。一つしかなかったが、ありがたかった九ホールのゴルフ場。ハンガリー人職員もいっしょの湖上遊覧とバーベキュー。毎年の忘年ノクリスマスのすしを食べる会。運動会。せまい大使館地下室の日本語寺子屋と飯田先生たちのすばらしい教育。ハンガリーの学校での日本語教

育。公邸庭の鯉のぼり。子供餅つき会。ひな祭り。

毎朝、毎週末、ベンジャミンといっしょのブダの丘や林の散策。ケールカーにとび乗ると、はじめ彼はこわがっていましたが、そのうちに、いい眺めだ、おまえはどう思う、という顔つきになりました。一〇分たらずにうちにそんなことができるのは、東京では夢のまた夢。

寛容と忍耐で、しかも、親切におつき合ってくださいくださった多くの在留邦人の方々は、もうほとんどブダペストにはいらつしやらない。十年一昔と申しますから、さびしいけれども仕方のないことです。

しかし、いつもの確な資料と情勢判断で私をたすけてくださった盛田教授が、あの同じビジネス・センタービルを根城に活躍しておられ、また、近く三井物産の吉岡氏がふたび所長として赴任されるとうかがいしました。とてもうれしいことです。

どうか皆様、すばらしいブダペストでの一日一日を、一期一会と大事にされて、たのしい思い出をいっぱい育ててください。鎖橋の下のドナウの水は流れて、二度ともどりません。

「ドナウ通信」発刊の頃

渡辺 伸

私がサウディアラビア・リヤドからブダペストの大使館に転勤になったのは八八年九月末でした。中欧の短い夏の残照にドナウの川面が光り、秋の到来を告げる風がその川面を吹き渡っている頃でした。

ワルシャワ条約機構の一員として外交軍事面ではソ連の最も忠実な衛星国、しかし、こと内政に関しては東欧諸国の中で最も自由度・開放度の高い国、一言で言うと、これが当時のハンガリーについての一般的な国際的評価ではなかったかと思いません。ゴルバチョフがソ連の起死回生のために、今やもう歴史的死語になったペレストロイカを進め始めるやいなや、この風をうまく利用して、対外的には、ソ連からのくびきからソ連を刺激しないよう少しずつ逃げ

出す、国内的には共産政権の内からの改革の推進 来るべき複数政党制へ向かっての布石が打たれつつある時期でした。これがいずれも成功し、ハンガリーこそはソ連東欧の政治経済改革の嚆矢になった国でした。

日本との関係ということになると、日本政府や外務省から見るとハンガリーはソ連の陰に隠れた一つの衛星国、ハンガリーのことはソ連を見ていればわかるということではハンガリー自体に対しては充分な関心が払われていなかったと思います。ハンガリーの対日感情は極めて良好でハンガリーからの対日期待も既にそのころから非常に大きなものがありました。日本側はそれに答えていなかったのが実状でした。

当時のハンガリーにおける日本人コミュニティは、リスト音楽院に留学していた人達も含め、百三十名くらいだったと記憶します。前述したようなハンガリーの国際的な地位や

両国関係の薄さもあって、我々はある種疎外感と淋しさを感じながらも、あたかも小さな船に皆で乗っているかのようにまとまりよく、毎年、運動会や忘年会など活発に行われていました。この日本人会に何か一つ欠けていることがあるような気がしていました。美しいドナウの名を会報でした。美しいドナウの名を取って「ドナウ通信」を発行することにしたらどうだろう、と思いついたのが私の着任から半年くらいたった八九年の春頃だったと思います。

日本人会長だった伊藤忠所長の草薙さんにご相談、勿論大賛成で、日本人会と大使館が一体となり、それに日本人学校補習校の飯田校長先生にも入っていただき編集委員会を作りました。このような際の日本人学校の存在は誠に有り難く、かつ、不可欠であり、日本人学校にはワーブ口印刷を一手に引き受けていただくことになりました。当時大使館は口

「メール・フロア」リシュ通りに面した家屋をハンガリー政府から貸与された事務所として使用していましたが、東欧における日本の地位を象徴するかのよう、外壁どころか室内の天井すらはげ落ちるような古い、手入れのされていない建物でした。その暗い部屋の中で「ドナウ通信」発行のための打ち合わせや編集会議を行ったこと、今鮮やかに記憶が蘇えりません。ことは急ピッチで進み、最初の構想が出てきてからおそらく一ヶ月もたない内に全てのことがつましく運び、八九年五月「ドナウ通信」第一号発刊にこぎつけました。

今や両国関係は当時と比べて格段に高いレベルに到達しており、日本人や日本からの進出企業の数も大きく増え、それにつれてこの会報も発行当時のものとは比較にならないくらい充実したものになっております。先日も最新号を送っていただき拝見しましたが、世界各地の日本人コミ

ュニテイでもこの種の会報の例はあると思いますが、商業ベースではないものとしては「ドナウ通信」こそは最高レベルをいつているのではないかと思います。

日本・ハンガリー両国関係の益々の発展、日本人コミュニティの繁栄、そして美しきドナウと共に「ドナウ通信」も流れ続けることを祈念しつつ、お祝いのメッセージとさせていただきます。

（追記）一九八八年から九〇、九一年頃のハンガリーを含めたソ連東欧の変革の動きは誠に急なるものがあったが、ソ連崩壊後の国際情勢の更にもた急ピッチな展開に、未だたつた一〇年にもならないその頃のことにはもはやあまり語られなくなっている。後記「追憶のブダペスト」は、私がハンガリーから帰国後、外務省の月刊誌『外交フォーラム』に寄稿したもののからの転載であるが、「ドナウ通信」が発刊された当時のハン

ガリーの雰囲気を知っていたただく一助として、これも読んでいただければ幸いです。

追憶のブダペスト

私は一九八八年九月、リヤドからブダペストに転勤、一九九〇年十二月まで勤務した。「いい時期にハンガリーに来た。これからこの国の動きは面白いぞ」と表敬訪問するたびに外交団の同僚にいわれた。

「ソ連の戦車に乗ってきた」といわれ、ハンガリー動乱以来三二年間、ハンガリー共産党第一書記の座にあったカーダールがその年の五月に退陣。代ってグロースが第一書記に就任、七月には米国を訪問し、改革路線が蠢動し始めた頃であった。ただ当時としては、あくまでもハンガリー一国の動きであった。それが東欧全体に波及し、ベルリンの壁を崩し、ひいてはドイツの統一、さらにはゴルバチョフの退陣とソ連邦の崩壊に

まで至るとは、何びとも予想しえないところであった。

私はハンガリーから始まった東欧の大変革を、その渦中で肌を感じつつ観察することができた。それは得がたい貴重な体験であったが、同時に深い感動をともなつた体験でもあった。

ハンガリーの改革は、ハンガリーがソ連の軛から脱し、本来の姿を取り戻すナシヨナリズム回復の過程であった。ゴルバチョフのペレストロイカという順風を巧みに利用しつつ、行きすぎないように、また順風が逆風に変わらないうちにできるだけ改革を進めておく。もし逆風になっても、また、よしんばゴルバチョフが倒れても、揺れ戻しをできるだけ少なくするよう既成事実を積み上げておく、八九年から九〇年にかけてのハンガリーの内政、外交の動きはこのようなものであった。

ハンガリーの動乱を中心とする第

二次世界大戦後のこの国の歴史をいくらかなりとも知る者にとつては、目頭が熱くなるような感動なしには立ち会えないいくつかの出来事があった。

その一つが、ハンガリー動乱時の首相で反革命分子として処刑されたナジの復権・名誉回復のための葬儀であった。この葬儀は八九年六月一日、ナジの処刑二三年目の日に、ブダペスト中心部にある英雄広場において六、七万人の参加のもとに行われた。

当時の共産党政権はすでに同年二月、ハンガリー動乱を「反革命」から「人民蜂起」へと再評価してはいたが、対ソ連・他の東欧諸国との関係上、また国内的にも、党として葬儀を主催できるまでには機は熟しておらず、葬儀の主催者は、翌年の三月に行われた選挙で政権を担うことになる「ハンガリー民主フォーラム」を主体とする当時の在野勢力であつ

た。

党・政府は、建前上は葬儀には無関係との立場をとらざるをえず、また外国からの一部情報の中には、葬儀に反対する党内保守派がこれを妨害し、大規模な騒擾も起こりうるというのもあった。この葬儀の頃までのハンガリーの改革の流れは、これほど脆弱なものであった。

葬儀会場はハンガリー国旗と真黒の弔旗で埋め尽くされた。国旗中央に真黒の円が描かれたものや、真ん中がくり抜かれたものも多かった。広場右手の博物館の階段が祭壇としてしつらえられ、ナジの棺を中央に左右それぞれに二つの棺と、ナジの棺の後方に四〇〇名の無名の犠牲者の棺が白い花に深々と包みこまれて安置され、ナジらの遺族、ハンガリー要人、一般市民、外交団などによる献花が深い悲しみの中に延々と行われた。一二時には、全国一斉に教会の鐘が鳴り、一分間の黙禱、ハン

ガリー国歌斉唱、そしてソ連軍の進攻を告げる一九五六年一月四日のナジの演説の一部が流された。

献花をする人、一般参列者とも涙を抑え、あるいは泣いていた。動乱で処刑された者、銃火に倒れた者だけでなく、ハンガリー国民全体が犠牲者であり、遺族であった。

過去の不正義は正された。そして同時に、この葬儀は、今から顧みると（当時としてはここまでの断定はできなかつたが）、暗い過去と決別し、ソ連の支配から自由な再生ハンガリー建設への流れを確実なものにし、その後の改革の動きに決定的な弾みをつけることになった（なお、葬儀から二〇日後の七月六日午前に下された最高裁の判決は、ナジの無罪を法的にも確定した。歴史の偶然というべきか、カーダール前書記長は同日朝、この無罪判決が下る直前に死去した。また、その五日後にはブツシュ大統領がハンガリーを訪問、

「鉄のカーテンは初めて開かれつつある。ハンガリーはその先駆者的役割を果たしつつある」と演説、その直後のアルシュ・サミットでハンガリー・ポーランド支援が決定された。

その後ハンガリーの改革は、紆余曲折はあったものの、全体としては、国のめざすべき方向についての揺るぎない国民的コンセンサスのもとに、一滴の血も流れることなく順調に推移した。「国のめざすべき方向」とは、立憲民主主義的政治体制と市場主義経済原理の導入による、疲弊した経済の建て直しである。

政治改革のほうは、完全自由選挙に基づく新しい議会と政府が成立し、九〇年半ばの段階で早くも一段落した。問題は経済である。旧東欧諸国の中では優等生といわれるハンガリーであるが、インフレ、失業、国営企業から私企業への転換、外国債務など難問山積で、閣僚、政府高官、国会議員など、国の舵取りをする立

場にある人々はもちろん、企業経営者、一般サラリーマン、労働者など国民のすべてがより良い経済、より高い生活水準の実現をめざして悪戦苦闘している。

在任期間の終わるころ、私はこのようなハンガリーの姿を見て、もしかしたら、ハンガリー人は、日本人より幸福ではないかと思うようになった。何故なら、たとえ今の状況は厳しくても、彼らはナシヨナル・コンセンサスに基づく確固たる国家目標を有し、それに向かって邁進しているからである。

日本や欧米先進国のように国が高い発展段階に到達すると、国家目標をもつことが困難になってしまうのだらうか。あるいは、そもそも今の時代、国家目標といったものを掲げること自体がすでに時代遅れなのだろうか。これらの点に対する答えはまだ見出せていない。

実現するか、マルトンの彫刻展

堤 功一

もう何年前になる。マルトン・ラスローの「リトル・プリンセス」を初めて目にしたのは、ブダペスト着任間もなくにナショナル・ギャラリーを訪ねた時のことであつた。小さな可愛い彫刻だ、と思つた。印象的な作品である。その時は作家の名も知らなかつたし、同じ形だがずっと大きい方のプリンセスがドナウ河沿いの欄干に腰掛けていることも知らなかつた。小さい方のプリンセスはナショナル・ギャラリーの館蔵品だが、何時も展示されているわけではなく、何回か訪ねてもその後はお目にかかつていない。

ブダペストに到着くにつれ、街の要所に多くの銅像が配されており、その中のいくつかがマルトン作であることが分かつた。リスト音楽院前

の広場でピアノを弾くリスト像、国会議事堂傍らの「ドナウの辺にて」という詩人像、大統領迎賓館中庭に立つフォーチューンの女神など、皆優れた作品である。各都市に銅像が多いのは、他のヨーロッパの国々同様ハンガリー文化が銅像を好むこと、昔からハンガリーには優れた彫刻家が多かつたことを示している。マルトンは現役のハンガリー彫刻家のうち最長老ではなからうか。同時代人ではヴァルガ・イムレも有名だが、彼は高齢でもう制作していないので、現役とは言えない。バルトーク記念館の庭にあるバルトークの立像は、ヴァルガの素晴らしい作品である。

私はハンガリーで良いブロンズの彫刻を一つ手に入れたものと思いが、そこへマルトンの名でご自分の作品を紹介する出版されたばかりの本を送つて来た。ドナウ河畔のプリンセスの写真がカヴァーになつて

いるものだ。この本を見てマルトンに会つてみたくなり、早速アトリエを訪ねた。文化も仕事のうちと思つたのである。令夫人が英語を話されるので、意志の疎通に問題はない。マルトンさんは私より数年年上だが、お元気なこと驚くばかり。今の奥様との間にキングとユリカという二人の可愛いお嬢さんがいて、当時七才と八才くらいだつたらう、まるで孫ではないかと思つて見ていた。

何回か訪問した後、結局マルトンさんから小さい方の「リトル・プリンセス」を譲つて頂いた。公邸の玄関に置いたので、その頃お出で頂いた方々にはお馴染みのものと思う。ナショナル・ギャラリーにあるものと同型で、その第二号になる。後に英国のチャールズ皇太子に第三号が献上された。ブロンズ像は一つの型から八個くらい迄は作れるものらしい。アトリエに並ぶ作品なども見て、私はマルトンの彫刻が大いに気に入

った。彼の作品は主として極めて具象的な人物像で、分かり易く、直ぐ親しめる。マルトンは多作で、精力的に制作する。代表的な作品は、公園や広場などに置く記念碑的な大きい彫像である。百を優に越える数の銅像がハンガリー中や国外で見られる。注文も多かったし、それに応じる能力も十分あるということだ。これらのものの中には高い精神性を伝えるものも多い。しかし私は動きが良く捕らえられている躍動感や心のぬくもりを表すものの方が彼の真骨頂だと思う。彼は天性の芸術家なのだ。旅行先の風景など水彩でスケッチするのがお好きなようだが、これらも大層魅力的な作品である。彫刻の作風は日本で言う佐藤忠良よりも富永直樹に近いと思われる。

でも出来ないか、ということになった。私共が日本に紹介したいと思ったハンガリーのものは二つあった。敢えて言えば三つ目としてコヴァツチ・マルギットの人形もあるのだが、これはきつと動かせないだろう。それでその二つというのはアールヌーヴォーのジョルナイの陶磁器とマルトンの彫刻である。経済移行期にあるハンガリー側からはお金は出ない。経費のことを考え、私は悲観的だったが、家内はお会いする方々皆さんにこの話を持ち掛けた。幸いに先ずジョルナイの方が実現した。アールヌーヴォー期にハンガリーで作られたジョルナイ装飾陶磁器の魅力に驚倒したのはウィーンでルドルフ・シユムツツさんのコレクションを見た時である。その時代のものに限れば、おそらく世界一の収集だろう。家内がお話した国際芸術文化振興会の野呂芙美子さんを通じて京都国立近代美術館の学芸員河本信次さんが興味

を持たれ、当時のハンガリーの建築、家具のデザインなどと一緒の展覧会を一九九五年、九六年に京都、東京、札幌と瀬戸の四ヶ所で開催できたのである。ジョルナイの作品はシユムツツさんの収集からのものが中心となった。見事な展覧会で嬉しかった。しかし陶磁器はまだ良い。日本人は陶磁器を身近に感じる伝統がある。アールヌーヴォーとなればガレーヤドームのガラス器で既にお馴染みである。ジョルナイはその同種の美を陶磁器とうわ薬で追求したものだ。それが彫刻となると話は別である。日本では絵は飾るが、彫刻を自分の家の部屋に飾ることはあまり無い。ましてブロンズ像は馴染みが薄い。あの頃ジェット口の田口隼人さんが、ブロンズ像を置くと部屋の品が良くなる、格が上がるというようなことを言っておられ、正にそうだと思うが、何しろ伝統が無い。企業の役員応接室などには飾るかもしれないけ

れども一般の関心は比較的薄い。広場の銅像も数は少ない。大きな本屋でも、画集は置いてあるが彫刻家の作品集はまず見当たらない。それでマルトンさんの展覧会はどうかだろうかと言っても、彫刻はどうも見る人が少ないのではないか、ということでは実現は困難のようだった。ハンガリー彫刻界第一人者の作品紹介だから十分意義はあると思うのだが、ところが、来年それが出来そうかどうかというので嬉しくなってしまう。日八友好協会専務理事の荻原道彦さんのご決断である。来年は初代ハンガリー国王イシュトヴァンの戴冠千年に当たり、友好協会もハンガリー・フェスティヴァルとして記念の行事を予定しているが、この行事の中にマルトン展を入れようとの話である。マルトン展が実現すれば、その最大の功労者は荻原さんだ。来年六月に東京芸術劇場のフォーイヤーで行う計画の由。東京都もOKしてくれたよ

うだ。これが出来れば、静岡県など他の地域でも可能になる。静岡県は、刺繍の研究で有名な文化服装学院の市川久美子先生のご紹介で、日本平の美術館が市川先生の刺繍やコースヤ令夫人ご斡旋のハンガリーのプチポアンとゴブラン織の展示と併行してやってくれるという。もとより日八友好協会にお金はないので、荻原専務理事や田中大使が現在寄付集めに努めておられる。また、家内が必要な連絡などに頑張っている。私自身は大体京都にいたるため仲々お手伝い出来ない次第なのだが、今週にでも国際交流基金が何らかの支援を考えてくれぬものか打診に伺おうと思っている。彫刻はブロンズでも大理石でも重いし嵩が張るので輸送が大変だ。基金から輸送経費やカタログ代など支援して頂ければ実現可能性は大いに高まる。今はまだ実現への願いと期待が先に高まってしまっているところだろうか。

文化大国とのお付き合い

田中義具

「ドナウ通信」一〇周年四〇号記念号を発売されるということ、日本から一言ご挨拶させて頂きたいと思えます。

ブダペストを離任してから間もなく二年になるので、この夏に家内と共にまたハンガリーを訪ねてみようかと話し合っている所ですが、私にとつて最後の在外勤務地となったハンガリーは、本当に思い出に残る国になりました。

どういふわけか未だにこの国が外国という気が余りしないのです。ブダペストから帰って間もなく外務省は退官しましたが、その間日本ハンガリー友好協会における活動が、今の私にとつての最も重要なボランティア活動となっており、色々な形でハンガリーとの関係を持ち続けると

いふか、むしろハンガリー関係の仕事が益々忙しくなってきたいて、この国のお陰で何時までもこのように勝手な現役気分であることが、何かご迷惑をかけることに繋がらなければ良いかと願っている所です。

ハンガリーに在勤し、この国の人たちと話をしている、一つとても深く感銘を受けたことが有ります。それは文化という問題の位置づけです。かつて現役の外交官として仕事をしていた時、なんとなく慣行としては、先ず処理すべきものが政治や経済の問題であり、文化の問題はそれからという感じがありました。

しかしハンガリー人から言われた事は、人間にとつて果たして文化より重要なものが有るだろうかということでした。確かに千百年以上も前に東方から現在の地に移住してきて、自然の成り行きとしては多数を占める周りの人達との同化が進んでしまつた中で、ハンガリー人をしていつま

でもハンガリー人たらしめてきたものは、その間一貫して引き継がれ、守られてきた、ハンガリー語であり、ハンガリー独特の生活様式であり、独自のハンガリーの伝統と文化に他ならなかったのではないかと思えます。彼らからこうしたハンガリー文化と取り除いてしまえば、最早ハンガリー人は存在しなくなるといふことではないかと思えます。ハンガリーは、政治大国でも経済大国でもないが文化大国であるというのがハンガリー人が持っている誇りであると理解しています。

こうした伝統を持つ国の人達とお付き合いをしていくにあたって、文化交流ということがいかに重要かは今更指摘するまでも無いと思えます。丁度今から三年前にハンガリーでマジヤール民族定住千百年をお祝いする行事があつた時、大使館としてもハンガリーとの友好関係の増進を考え、日本の方々に広く参加を呼び

かける努力を行った所、日本人のお祭り好きの国民性も手伝つて、非常な盛り上がりを見せる結果になりました。この時の日本の各方面の対応振りについては、その後いつまでもハンガリーの人達からとても感謝されました。

日本に帰つて、今度は来年ハンガリー初代国王戴冠千年祭の機会に日本でハンガリー・フェスティヴァルを盛大に開催しようという計画が持ち上がり、日本・ハンガリー友好協会と在京ハンガリー大使館が中心になつて、現在熱心にその準備が進められています。

今の日本の経済情勢は、盛大な文化行事をするにはどうしても必要となる資金を十分集める事が出来るような状況には有りません。しかし日本とハンガリーの関係は、冷戦終結後の過去一〇年の間に飛躍的な発展を遂げてきました。両国間の文化関係も、こうした日本とハンガリーの

新しい関係を正確に反映したものに
ならなければならないと考えていま
す。

幸い日本の中にはハンガリーの国
や人々に好意と関心を持ち、両国民
間の交流を深める為に何かをしたい
と思つておられる方々が多数居られ
ます。友好協会の仕事は、こうした
方々の熱意と行動を引き出して、現
在の両国関係にふさわしい行事へと
盛り上げていく事ではないかと考え
ています。どうかハンガリー在住の
日本人の皆様も、こうしたわが国で
の動きの応援方よろしく願ひした
いと思ひます。

私たちの夏休み

堤 一実

よろい戸に射し込む朝の光に目覚
め、ああハンガリーに居るのだつた
と思う夏休み第一日目の朝。八月を
このセンチンドレ近くの小さな小舎

で過ごすようになって、これで五年
目である。

庭のアカシア、櫻、菩提樹、くる
み、ライラック等々の木々は一年に
一ヶ月しか居ない住人の留守の間に
伸び伸びと大きくなり、年毎に庭も
空も少しずつ狭くなつていく。春の
花々の美しさも、ライラックの香り
も時々見に来てくれる友人から聞く
ばかりで一度も楽しんだことのない
私たちである。

ほんの小さい土地に二人以上は住
めない小屋がくつついていて。これ
が私たちの夏の根拠地で、遠く日本
からわざわざやって来るにしては誠
にお粗末なもの。近所の人々も変な
日本人と思つていることだろう。

両隣は引越したお医者さん達の
ものだったが、加齢現象でここ一、
二年で夫たちは亡くなり、一軒は売
りに出されているし、一軒はフラン
ス在住の子どもに譲られたらしく、
フランス語一家が訪れるようになって

た。

ドナウ河に下枝を浸す大木の影を拾いながら遊歩道を辿ると、ゆつたりとした庭にモーター・ボートが引き上げられている家もある。良く手入れされた芝生に花が美しく、覗き込もうとすると犬が吠えたてる。チリンと追い抜いていくのは親子連れの自転車の一群。何ともゆつたりとした雰囲気ハンガリーの豊かさの奥の深さを垣間見る思いである。河畔のレストランの庭でグーヤシユと空揚げのフォガシユを食べ、行き交う船を眺め、フェリーの往來をぼやつと見ていると、身心のんびりとして休暇を実感する。夫が夏休みのある職業を選んだのもこの為だったのかしらん。ハンガリーから帰国して早くも五年目。東京と京都を行ったり来たりしている夫であるが、「旺盛なる」自立精神のおかげで単身赴任も板につき、食事作りも苦にならないと言い、好きな仕事とてス

トレスもなさそうだし、今のところ心配はあまりないが、ハンガリーでのリフレッシユは貴重なのかもしれ

ない。
夏毎にブダペスト近辺の発展には目を見張る。昨年の驚きの目玉は、セントンドレ南方の道路沿いに出来た巨大なスーパー・マーケット「コラ」であった。ワインの売り場も広々として種類が多く、あれこれ楽しんで長居をしてしまう。

折角ヨーロッパ大陸に居るのだから点を線にしようと、近くはオーストリア、イタリー、又は一寸中近東辺りと気軽に足を伸ばせるのは有難い。今年帰路ロンドンに寄って旧友たちに会うつもりでいる。

八月二十日の建国記念日の花火は、敬愛するK・F夫妻のお招きで毎年いつものお仲間と共にブダペストの豪華な夜景を独り占めするような高台の素晴らしいお宅のバルコニーから楽しませて頂いているが、この都

の地形の美しさを花火と共に心ゆくまで堪能するチャンスである。

この日を境にするように空も風も秋の気配を漂わせ始め、落葉も増え、小舎は朝夕少々寒くて重ね着ルツクとなる。あつという間に帰る日が近づき、夫は芝生と呼んでいる雑草を「ごしごし刈り、私は身辺整理に取り掛かる。いつの間にか隣近所の家々も戸締りして、静かになってしまった。さて、よるい戸を閉めて、私たちの長くて短い夏休みも終わりとなる。

人道と外交

糠沢 和夫

杉原千畝氏が一九四〇年に多くのユダヤ人を救ったことは誰もが知る。スウェーデンのワレンベリー財団の調べだと、同じことをした外交官が世界に一人いる。その中に、ハンガリーではスイス領事のロッツという人がいる。一九四四年、もうナチの類勢は明らかなのに、当時六〇万人以上いたハンガリーのユダヤ人のうち、ナチは四ヶ月で四三万八千人をアウシュビッツへ送った。ほとんどがそこで命を失っている。

このとき、ロッツ氏は、ユダヤ人を救うために、何人もの写真と個人情報を一枚のリストにしたものでパスポートにかえるやり方をナチにみとめさせ、まずユダヤ人八千人の枠を得た。枠が一杯になると、また番号を適当に戻してごまかし、五万人位を救ったらしい。やがて「ガラス

の家」と呼ばれることとなる民家を借りて約三万人の人々をも次々にかくまった（読者で、この場所を知っている人がいたら教えて欲しい）。

ロッツ氏のしたことは、中立国外交官の規を越えたものだった。戦後出世せず退官したところは杉原氏に似ている。五月末に開かれた「ユダヤ人を救った外交官写真展」の開会挨拶でゲンツ大統領は「外交の核心は人間関係で、人道に対するコミットメントがあつてこそその外交だ」と肩をふるわせて力説した。

写真をみると杉原氏もロッツ氏も普通の人に見える。かえつてホツとするぐらいだ。だが、ガス室で昼夜兼行でユダヤ人の命を止めつづけた人達も仕事外では普通の人であつた。人間は弱くできています。良心は麻滅しやすすいし、魂の官僚化は組織に属する者のだれの中にもみられる。

では人道とにか。それは、他人の不幸の場に自分を置きかえて見る

想像力のことだ。この想像力は、外交に携わる者に欠かせない。外交官が多忙で考える時間がない、というのは言い訳にはならない。決断の役割につくまでの三〇年の準備の上での応用動作の筈だからだ。稲妻のように一瞬のうちに曲折して目的を達する修練を積み重ねば、と自戒する。

現地の事情は半年もすれば大半は判る。それから先、相手に訴え、東京に訴え、問に入つて思考停止をしないのが外交官の値打ちで、民間の人が、外貨不足の国に重電機を売り込む苦労と似ている。売れなければ誰を責めることもできない自分の所為なのである。官でも民でも同じだ。

十年前、シヨプロンの鉄条網を開く決断は、一瞬のうちだが、それまでの五〇年の苦節のエネルギーのマグマがこもっている。人道のマグマに信頼した者が勝つたのである。

第三部

補習校篇

「ドナウ通信」創刊の頃

飯田 信夫

「ドナウ通信」が十年目を迎えた
とのこと、創刊の編集に携わった者
としてこれ以上の喜びはありません。
創刊の八九年は、大変緊張した、
東欧改革の年でした。

国が良い方向に向かっているとい
う意識と、五六年のハンガリー動乱
の不安が重なって、将来を真剣に見
詰めていた時期。在住者の結束も固
まり、その中で発行されたのがこの
ドナウ通信でした。

ハンガリー国内で起こっているこ
と、在住者の動向、補習校の子ども
たち。いろいろなネットワークをつ
なぎ、伝言板としても利用していた
だく意図での創刊でした。

忙しい時間の中でしたが、様々な
方から情報をいただき、整理・編集
し、私の妻がカットを描いて補習校

の印刷機を回していました。家内制
手工業です。配布したときの皆様の
笑顔が楽しみのボランティア活動で
した。

現在も私は、教育者として、人と
人とのつながりに喜びのもてる子ど
もの育成に尽力しています。つくづ
くと思うことは、ブダペストの子
どもたちの恵まれた環境です。も
言葉では大変な苦労を強いられま
すが、反面、日本国内にはない温か
い見守りがあります。大人も子ども
も、声を掛け合う生活。子どもたち
がだれにも心を開き、素直に話せる
生活は、在住しているときには分か
らないすばらしいものだったことを
思い出します。

ハンガリーにしかない素晴らしさ、
ハンガリーでの暮らしのよさを、も
っともっと味わってもらいたいと思
います。

そのためにも、「ドナウ通信」が継
続、発展し、人々のつながりがより

深まりますよう、お祈りしています。
ドナウ川に、美しくそして力強く
架かる橋を愛する者として。

(飯田先生、現在、武蔵野市市立関
前南小学校に勤務されています)。

補習校の歴史

園部 文夫

「ドナウ通信」一周年おめでとう
ございます。この機会に補習校の歴史
と以外と知られていない補習校の
仕組みについてお話ししたいと思います。

学校の沿革（歴史）

一九七六年四月

「ブダペスト日本語補習校」と
して開校。幼稚部三名、小学部
六名、中学部一名、合計一〇名。
幼稚部毎週土曜日。小中学部週
三回、国語・算数の複式授業実
施。講師（留学生）三名。

一九七九年六月

月曜日から土曜日までの準全日制
日本人補習校として単式授業開始。
名称を「ブダペスト日本人補習
校」に変更。夏期特別時間割を組

んでの集中授業開始。

一九八〇年二月

専任教員一名着任。教員数一名。

一九八二年四月

派遣教員一名着任。教員数二名。

一九八三年四月

中学部新設。

一九八四年八月

学校行事として合宿を開始。

一九八八年三月

一〇周年記念文集発行。

一九八九年三月

ブダペスト日本人補習校校則制定。

一九九〇年五月

校章・校旗制定。

同年十二月

校歌制定。（藤原梨恵子 作詞、

小林研一郎 作曲）

一九九二年四月

専任教諭一名増員。教員数三名。

一九九三年五月

モーリツ高校へ校舎移転。

一九九六年二月

財団法人 FOUNDATION FOR

EDUCATION IN JAPANESE

LANGUAGE

発足。

同年四月

常勤時間講師一名着任。

教員数四名。

一九九七年七月

INTERNET 導入。

同年九月

児童生徒数が初めて五〇人を越え

る。

一九九八年四月

中学部教科専任制実施。

同年九月

コンピューター・ルーム（教材室）

設置、パソコン教育開始

補習校の設立者と目的

ブダペスト日本人補習校は、日本
人子弟が日本語及び日本人としての
基本的な資質を養い、日本人として
の自覚と豊かな国際感覚を身につけ、

日本やこれからの国際社会でその能力を生かし活躍することを目的に教育を行っております。特に子どもたちは現地校や国際学校に在学していますので、補習校では国語、算数を中心に社会・理科などを日本の教育課程に基づいて日本の教育方法で行っています。

そしてブダペスト日本人補習校は、日本人会によって設置されています。よく補習校の保護者が設置者と間違える方がいらつしやいますが、日本人会の要請により日本人会の責任で設置されています。ここにいらつしやる日本人のみなさまが、子弟（子どもたち）に教育を行う目的で設置し、政府（文部省・外務省）が援助を行っております。

また、補習校を公立の学校とお間違いの方も多いようですが、今のべましたように日本人会が設置したれつきとした私立学校です（日本政府やハンガリー政府が設置したもので

はありません）。ですからこの費用は、日本人会（商工会）の寄付・日本政府の援助・補習校の児童生徒の授業料でまかなわれています。しかしながら日本の義務教育段階にあたりますので、私立学校ではありませんが子どもたちに教育の機会をできるだけ与えるために、授業料等があまり負担にならないように配慮されています。日本の私立学校のように高額な授業料はさけ、日本人社会（日本人会）の協力を得て運営されています。

設置者は日本人会ですが、補習校の経営は理事会、日常の補習校の運営は補習校運営委員会によって行われています。それぞれ日本人会（商工会）、大使館、保護者の代表がその任に当たっています。そして学校の教育課程及び授業は、文部省派遣教員を中心に補習校の教員（三名）が行っています。

さて、補習校の仕組みについてはお分かりいただけでしょうか。補

習校がみなさまの意志で設立され維持されているのですが、少々気になることもあります。

最近ブダペストの日本人社会も大きくなり、補習校の生徒も増え（現在四四名）とても喜ばしいことではあります。一方で日本人社会と補習校の距離が開いてきているようにも思えます。保護者ではないみなさまは補習校との接点は運動会ぐらいで、なかなかお目にかかる機会も少ないように思えます。

糠沢大使をはじめ企業のみなさまが、よく補習校の見学に来て下さいます。本当にありがたいことです。また、補習校に何か協力できないかと申し出をいただくこともあります。

コンピューター・ルームの設置にあたりましては、野村證券、三菱商事、住友商事のみなさまに機材を寄付して頂いたり、協力隊の田中章夫隊員（すでに帰国）に協力を頂きました。

また、マールナの会や日本に帰国されるみなさんに本を、図書室に寄贈して頂いています。

しかし、一方でお目にかかる機会や補習校の子どもたちとまったく接することなく帰国される方も多いのではないかと思います。補習校では授業参観や行事の参観(参加)など、自由にできるように心がけています。また研究授業(実験授業)も行っていますので、今の教育の問題やそれに学校がどのように取り組んでいるかが分かると思います。子どもや教育に興味や関心をお持ちの方は是非参加して頂きたいと思えます。

また図書室の本や教材などを補習校の教育活動に支障がない限り、できるだけ貸し出すなどの提供をしています。日本語の学習や児童書など、または教育(現地校・国際学校も含めて)の情報はかなりのものが提供できます。

また、子どもたちの勉強の様子を

見ていただき、叱咤激励していただきたいと思えます。実際に現地校と補習校の勉強の両立は、子どもたちには大変大きな負担です。国際社会で活躍されるみなさまの訪問は、子どもたちに大きな精神的な支援となるはずで、みなさまの海外で体験などを、是非子どもたちに聞かせて欲しいと思っています。

どうぞみなさま、一度補習校に見学に来て下さい。みなさまのご来校をお待ちしています。

*ブダペスト日本人補習校の連絡先
c/o Moricz Zsigmond Gimnazium

1025 Budapest II.

Torokvesz ut 48-54 HUNGARY

TEL/FAX +36-1-200-8856

E-MAIL bpjpschool@pronet.hu

*補習校への行き方

バスチャニー・テール(地下鉄二番)で降りて一番のバスでモーリツ高

校(Moricz Zsigmond Gimnazium)で降ります。一〇番目ぐらいです(それ以上かもしれない)。

進行方向の左側に大きなレンガ造りのモダンな校舎が見えましたらバスを降りて下さい。入り口を入れて、正面の階段を下りてすぐ左側が補習校の職員室です。日本語で表示してあります。